

脇へ投げりなり。圖は抱き上げて今正に投げんと爲す姿勢なり。
相手も右手を以て疊を打ち仰向に倒るゝものなり。
左横腹と我が右横腹の處を抱き合ふて居る我が體を右へ捻りな
がらに投るなり圖を能く見るべし。

柔術釣腰圖解

柔術釣腰圖解

相手の身體を引附けて左手にて右袖口を取り右手にて相手の左
腕の外部より背部の帶を取り又右足を持ち上ると同時に相手の
身體を崩し下腹四肢に力を入れて相手を釣り上げ同時に入腰投
の如き心持にて我が身體を左へ捻りながら倒るゝ勢にて相手を
投げ倒すなり。

釣腰圖

敵を抱込で腰を上持て我が前へ倒らすなり



柔術腰固圖解

此の圖は双方共相摸の姿勢の如くに成り居る處なり。

柔術腰固圖解

双方共左手は右袖口を取り相手の左脇帯を右手にて取り相手は

柔術腰固圖解

一八〇

腰固圖

此の捕方は圖畫が面度のゆるなへ次圖を略す



我が背部を掴み双方共に腰を下げて引締め居る内氣合を計りて

我は腰を延ばすと同時に右足先に力を罩めて右より左の方へ跳ね上る同時に腰を差入れて左へ倒すなり。斯の如き仕合は双方互角の取口なり。圖にては業の掛け工合解り兼ねる點なきにしてもあらざれば釣腰の如くにして業を掛くるも宜しとす。是れより種々變化あれど右足を外より跳るか又臥業に成るを宜しとす。

柔術肩車第一圖解

相手の左袖口を充分に引張り相手の身體が前へ踏跟に乗じ尙強く引き右手に力を入れ右足を後方へ一歩引下げる同時に腰を踏めて圖の如く相手を引き込めると同時に左手を相手の兩股の内より差入れて左太股を抱き込み第一圖の如く肩へ引き被ぎ兩爪先に力を入れ直に第二圖に移る。

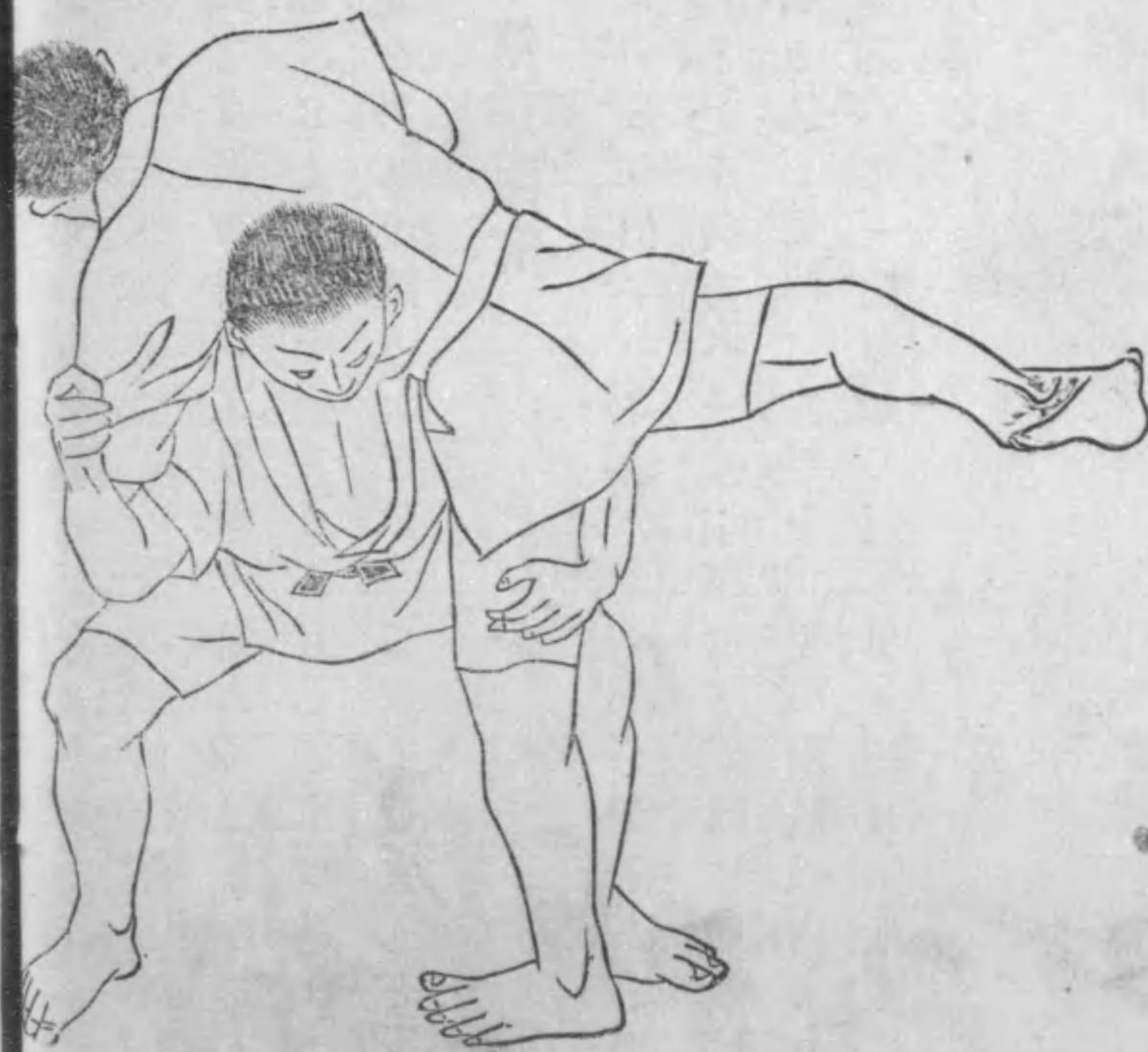
柔術肩車第一圖解

一八一

肩車第一圖

敵を腰で込引下を直げ延又し採の處

柔術肩車第一圖解



肩車第二圖

腰を延して右肩口より乙る者を既ん投に處る

同第二圖解



同第二圖解

柔術隅返し臥業圖解
一八四
下腹及兩爪先に力を罩め腰を延ばして被ぎ上げ右肩口より我が前に引落し投ぐるなり。
稽古中投ぐる時右手は相手の袖口を持ちて手を放すべからず相手も足を先に疊に附け手を打つて前に仰向に倒ると知るべし。
第二圖の被ぎたる手足の働きを能く見るべし。此の形は外見能く又掛り易き手なるが初心の内は可成相手の身體の我れより大なる者に掛けるは宜しからずと知るべし。

柔術隅返し臥業圖解

此の形は捨身業第二圖に似たる處あれども總じて臥業と云ふは柔術家には得意のものである臥業は手足の働きを自由に爲し離れ業が出来ものなり。
此の隅返と云ふは双方共定式法にて出で我より臀を疊に附けて相手の下に成り相手は是に附入りて押へ込まんと爲す故に我が

胸の處へ相手の頭を左手にて引附けて右足先に力を入れて相手の左内股の上の處を跳ね上げ左足は相手の右足元へ附けて右

隅返し臥業圖

此の業は眞捨身のくすれから是に至る事あり面白き形なり

手先に力を罩め相手の左脇の下の處へ押當て(エイ)と右手右足を押上げ左足は疊に附けて左手は充分に引き附け掛聲と共に我



柔術隅返し臥業圖解

柔術操隅返圖解
が左隅の處へ投げるなり相手は仰
向けに左手を打つて斜に左隅へ倒
るゝなり。

柔術操隅返圖解

操り隅返圖

此の形は圖がよく出来てある
参照すべし



此の操り隅返と云ふは相手が我を押し附け来る時態と仰向に倒
れて左手にて相手の左襟際を取り右手にて左脇の下より差し入
れて背部の稽古衣を掴み右足先の甲を相手の臍下に押當て左足
裏にて相手の右内股に押當て圖の如くの姿勢に成りたる處にて
直に我が右隅の處へ(エイ)と一聲三拍子揃へて返へすべし。相手
は我體を越へ右手を押しつて仰向に倒れるなり。

柔術達摩返圖解

此の形は右へ投ぐると見せて左へ倒すなり兩手にて相手を充分
に我が胸の處へ抱き込み最初右向きに成る時左足先に力を入れ
て一寸倒すと見せて直に又左向きと成る時右向臍にて相手の左
内股の處を強く跳ね上ぐると同時に我が左隅へ投げるなり。相
手は倒れても手を解かぬ時は上より直に締め掛かるを宜しと
す。相手の腹部に馬乗になり兩膝頭にて腹を押し附けるべし。

達摩返圖

右足先の敵が左内股に掛りて掛の圖

柔術達摩返圖解
隅返と少の違ひなり。

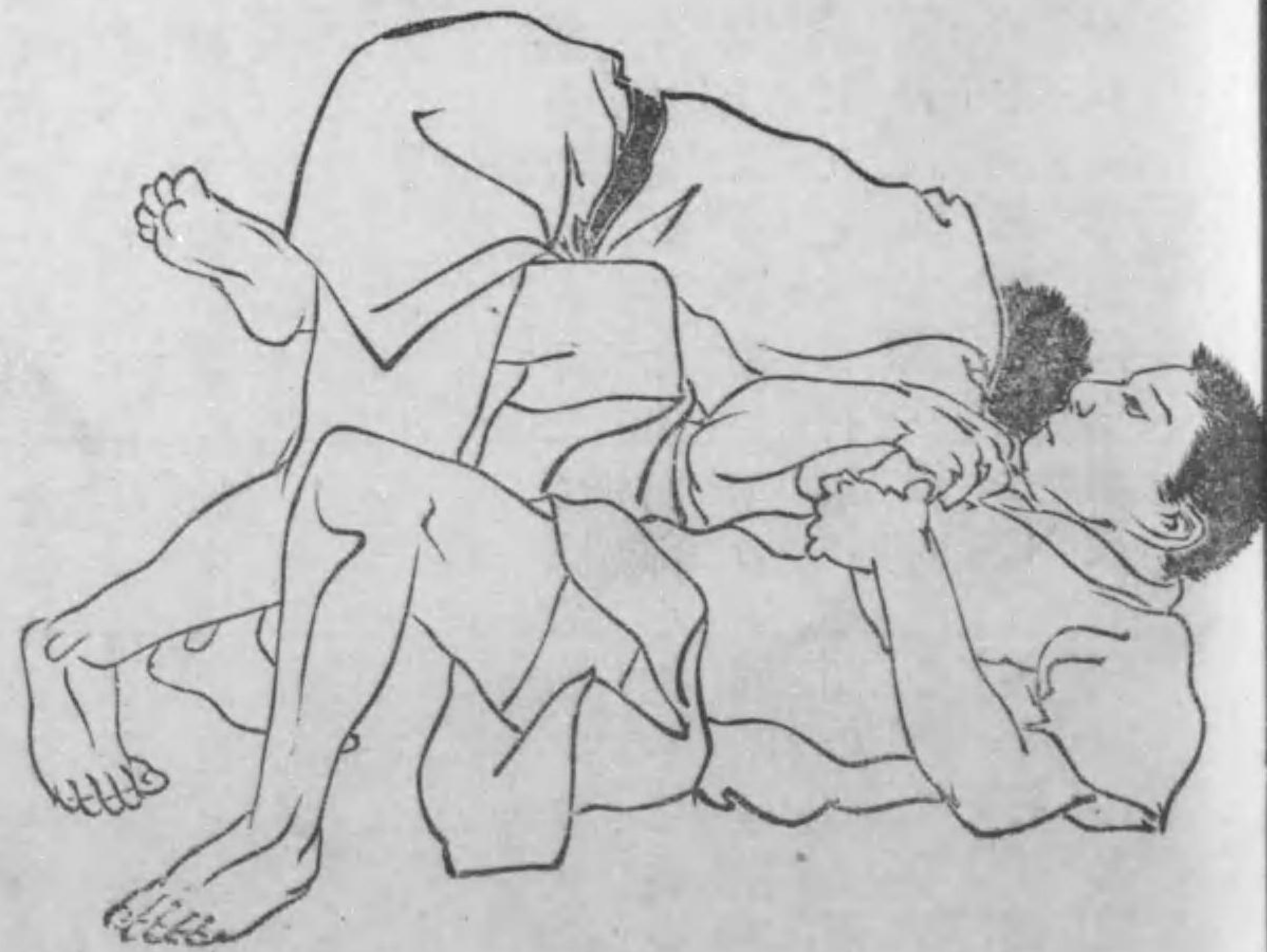


柔術引込返圖解

此の引込返も相
手の右手を以て
強く突張り来た
る時我が腕で
抱込みて後方へ
下りながら臀よ
り仰向に倒れて
右足を相手の兩
股の間にに入れて
左膝を立て爪先
に力を入れて臺
に爲し我が身體
を右の方へ向と

引込返圖

此の足業に足を留て敵を倒すべし



横落圖

敵を抱込左横へ落す處の圖



柔術横掛崩圖解

柔術横掛崩圖解

柔術横落圖解

柔術横落圖解
 同時に右足先に力を罩め高く跳ね上げ相手を仰向に倒して我は直に起上り眞之位第二圖の構へを爲して相手が再び掛り來るを待つなり。我亦直に締め掛るも他の業を施すも可なり。臥業は手より足の働き肝要なり。

柔術横落圖解

是れは相手の右袖の外より腕を我が左手にて圖の如く巻き込み八ツ口を取りて右手は相手の左脇の下より背部を抱へて我が臂を疊に附けて倒るれば相手は上より押附けると同時に相手の右足を我が内股に入れ右足裏にて足首に押附けて圖の如く兩手を先に力を込めて直に我が身體を左後方隅へ振向く心持にて我身を捨て其勢にて相手を投げるなり相手も左手にて疊を打て倒るること横捨身の如くなり。是れは講道館指南役故横山作次郎氏の得意の手なり。

橫掛崩圖

本圖の如く左へ投る處



我が左手は相手の右袖外側の奥を取り右手は表襟を取り我は二
三步後方へ後ると同時に我右足を相手の右足の外に踏み止めて

柔術横掛崩圖解

柔術跳越圖解

臀を疊に附け兩手先に力を罩めて左肩を左へ向ると同時に(エイ)と右膝を枕として我體を捨てながら左後方隅へ引落投ぐるなり
相手も左手を打ちて仰向に倒るゝなり。此の形は講道館にては
横分と云ふ。此は兩手を強く引くと同時に横捨身を掛くる心持
にて業を施すものと知るべし。

此の業は入り亂れて戦ひたる後の臥勝負になり。我が兩手にて相
手の兩袖口の外部を掴みて我は仰向に臥し兩足にて相手の左股
に押當て左足は右脇の下へ掛け相手が我が腰帶を引締めて袖を
取らんと爲したる時兩手兩足先に力を罩め相手の左足の膝を立
て居るを(エイ)と一聲投ぐるなり我が身體の上にて廻轉し頭部前
方へ投げたる形は眞捨身にて投げられたると同じ様になるなり。
此の業は兩手は強く引き兩足は跳ね上る心持が肝要なり。

柔術跳越圖解

跳越圖

引込て既に頭上を越して向へ投る處の圖

總じて固業に成ると初心の内は成るべく他人の稽古を見學して我が業の上達してより行ふを宜しとす。此の業は相手を組伏せて起上られぬ様に防ぎ又は我を押へ込みたる上の者を跳ね除ける術なり。

柔術固業の解説



今迄の立業は相手の力を利用して投ぐるものなるが故に業も掛け易かりしが此の固業又は締込關節業は我が實際の腕前を現はさざれば出來難し卷末に蘇生活法圖解もあれど此の以後の業は上手の者に就いて充分稽古を受くるが肝要なり。近來山師的の者が大々的新聞廣告を以て斯道に志す地方の人士を偽り無法の金圓を貪り取り爲に購求者間に不平の聲高しと聞きたり。本書の如きは武士道鼓吹の目的を以て広く天下の有志者に便利を與へんが爲め格外の安價を以て紹介せるなり。讀者諸君著者の微意を諒せられよ。

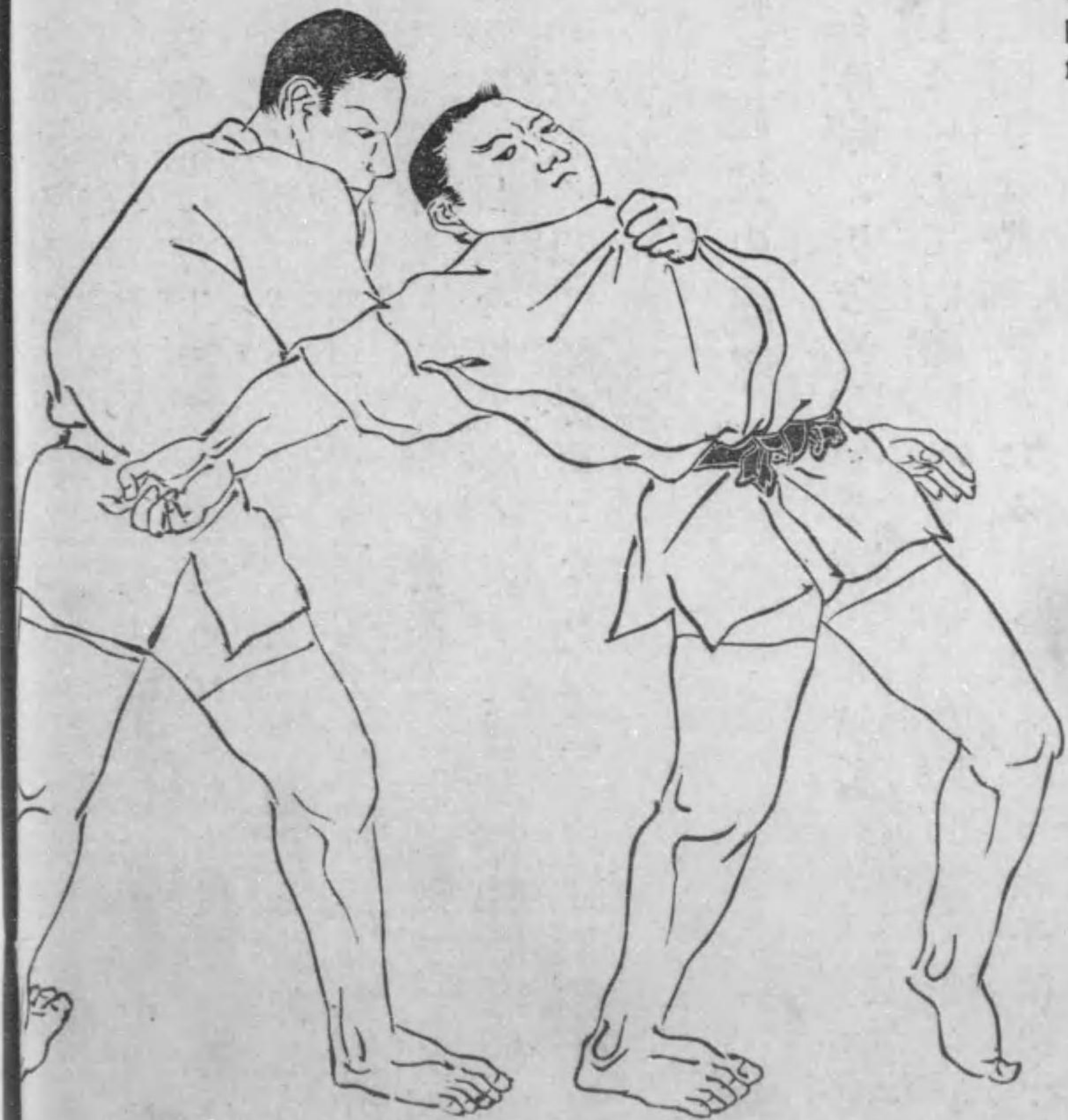
柔術連固投の圖解

是は相手の右腕を外より抱き込みて相手の紋所を右手に摑み左手を以て左肩口よりして右襟際を取り我は左足を後へ開くと同時に(エイ)と一聲兩手は襟を絞めたるまゝ投るなり相手は四ツ

連固投の圖

甲が絞るたり時乙は早は負く示すべし

柔術連固投の圖解



這に倒れるなり揚心流にも此形あり。

柔術襟四方固圖解

此の形は我が右手先にて相手の左肩口より襟を掴み左手は相手の左脇下より右襟を取り兩股にて相手の頭を挟みて兩臂を疊に附けて起さぬ様に爲すべし我が頭にて相手の臍の處に押當て一寸横向に成りて腕を締めるなり。



柔術襟四方固圖

柔術襟四方固圖解

柔術腰四方固圖解
一八九
相手も前の如く兩足先に力を入れ臂より起き上る事を心掛るなり。起き能はざる時は負を示すべし。下に成りたる時は兩手先を以て倦くまでも起き上る様に心掛へし。
此形は種々に崩れる事あり故に講道館にては崩上四方固と稱す。

柔術腰四方固圖解

腰四方固圖



是は兩膝を曲げて太股の處にて相手の頭を挟み兩脇の下より兩手にて相手の兩腰帶を取り我が下腹の處を相手の顔に押し當て兩腕を引締め兩股にて首を挟みて固めるなり。相手は眞向き成るも顔は左右の何れにか向け居るを宜しとす。我れも又相手が右に起き上らんと爲したる時は右の方へ力を入れ又左に起き上らんと爲したる時は左へ力を入れて防ぐべし。相手も起き上る能はざる時は直に負を示すべし。

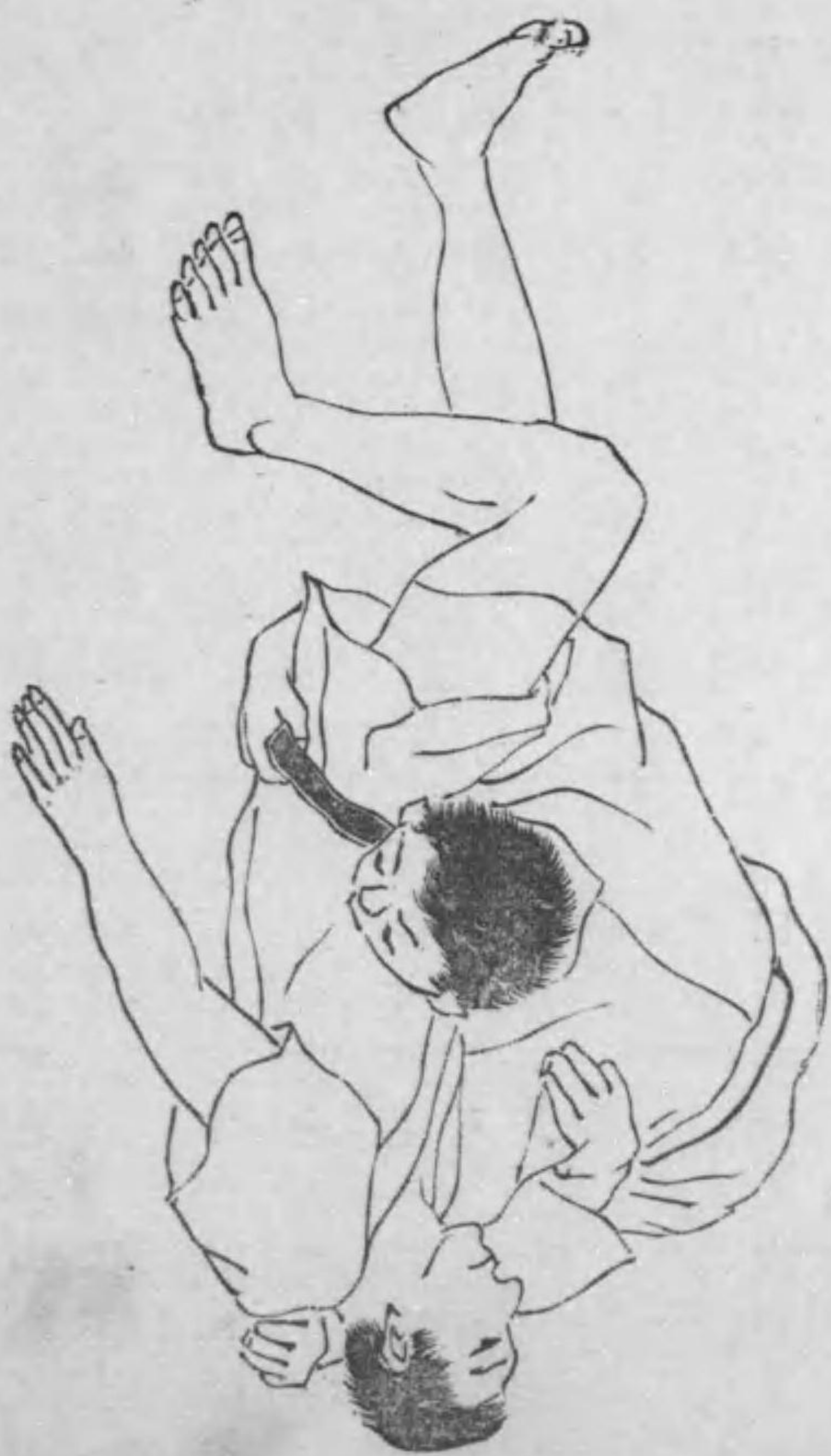
柔術横四方固圖解

此の固方は相手の右側に在りて右手にて相手の内股より差入れて帯を取り左手は相手の右脇の下より首筋の襟を取り我が胸部を相手の腹部へ押當て兩膝を開きて引き締め固む相手が起き上らんと爲す時は力を罩めて起きぬ様に防ぐなり。又押へ込まれたる者は此れに反して左手を延ばして上の者の左肩口より帯を

取り右手を添へて起上る事を勉むべし試合等に際し行事ある時は何分間とか時間を限り其の間に起き得ざる時は負となるなり。

柔術袈裟固圖解

二〇〇



腰四方固圖

此の固方は圖の如く我は相手の腹部へ右脇より掛かり左手にて相手の右腕を巻き込み右手は相手の左肩口より背部の紋所を握りみて相手の自由を妨げ兩足は少し跼めて充分に相手の腹部へ右

柔術袈裟固圖解

袈裟固圖



二〇一

柔術袈裟固圖解

抱返圖

此の抱返は敵が負かぬ時
の本文は時ぬ打を負が敵はし返抱の此
しべすにく如

柔術抱き返し圖解



二〇三

柔術抱き返し圖解
脇腹を押付けて固めるなり。
相手は例の通り臀より兩足に力を入れ兩手にて上の者を倒して
起き上らんと勉むるが臥勝負の肝要なる處なり。
臥勝負は狭隘なる場所にては爲すべからず他に稽古する所無き
時は充分注意して稽古すべし。

二〇二

柔術抱き返し圖解

此の抱き返しと云ふは押へ込の崩にて起き上り又捨身等の崩れ
たる時に相手の脇の處へ摺り寄り相手の左腰の處へ密着して右
手にて背部より抱き込み手先にて相手の上襟を取り左手を添へ
て左足を相手の左脇の處へ踏み込み右足を後へ引と同時に我れ
より仰向に捨身となりて相手を我が右後隅へ役げるなり。相手
も右手を打ちて倒るゝなり。此の如くなる時は後捕裸捕等を爲
すも差支なし。講道館にては抱分と稱す。

柔術喉頭固圖解

是は俯向に倒れたる時直に背部へ押し掛りて我が右腕を相手の



喉頭固圖

右肩口より喉に圖の如く掛けて左手は相手の左腕下より左脇へ差し入て両手先を組み我は右脇腹の處にて押し附け右腕を締めて右膝を曲げ左膝を立ち足先に力を入れて相手の起き上るを防ぐべし。相手は四肢の先に力を入れて起き上ることに勉むべし。我は咽喉を右腕にて締め相手が左りに力を入たる時には我が左り手を持ち上げると相手は自由を妨げられるなり。此の押へ込は種類多くあれども大略は記載せし故此位にて擱筆す他は諸君の腕次第なり。

柔術締込逆手の説明

凡そ柔術極意秘傳に近き締業逆業の類は場合に依り締落(假死)し逆手にて怪我を爲すことあれば殺活法を能く心得て術を行ふべきなり。教師又は先輩の者と稽古を爲すべし。

左片胸捕締圖

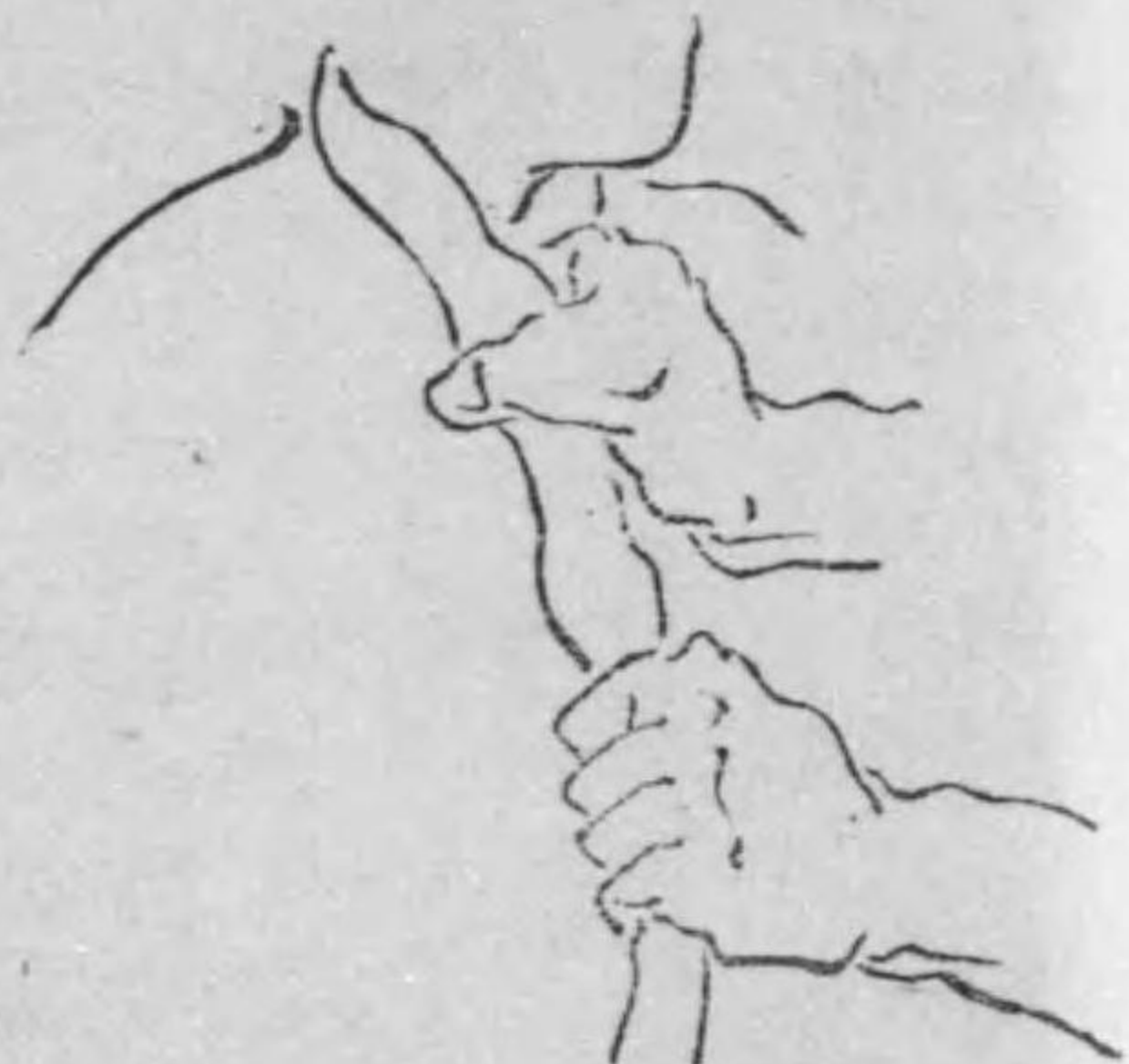


左片胸捕と云ふは我が両手を相手の上襟を合せて咽喉際にて握り、圖の如くに爲して我が拇指と小指に力を入れて右手にて上襟を下へと引締るものなり。此時相手は兩手先に力を入れて兩臂を張り我が握り居る右襟を掴み同様に開く時は解るものなり。我は左を解かれば直に右に替へ前に同じ形にて業を行ふなり。

柔術右片胸捕締圖解

右片胸捕は最初前と同じ相手の襟をば搔合せて右手にて握り小指より拇指に力を單めて圖の如くに爲し左手を添へて下へジリ

右片胸捕締圖



柔術逆業の解説

逆業と云ふは固業よりも危険なる故に能く熟達の上にて已より先輩の者と稽古すべし。講道館に於ても投業を専門とし次に固業迄位を教へ逆手は教へぬ事に成りありと聞けり。故に試合等には逆手は用ゐざるを宜しとす。唯無法者等を捕り押へる等都て護身の時には心静にして充分術を施すべし。

ジリも引き締るなり。相手も是を解くには前と同じく左右の手先にて掴まれたる襟を持ち臂を張り開くなり圖の如く直に解けるものと知るべし。左右捕方の圖を能く見るべし。

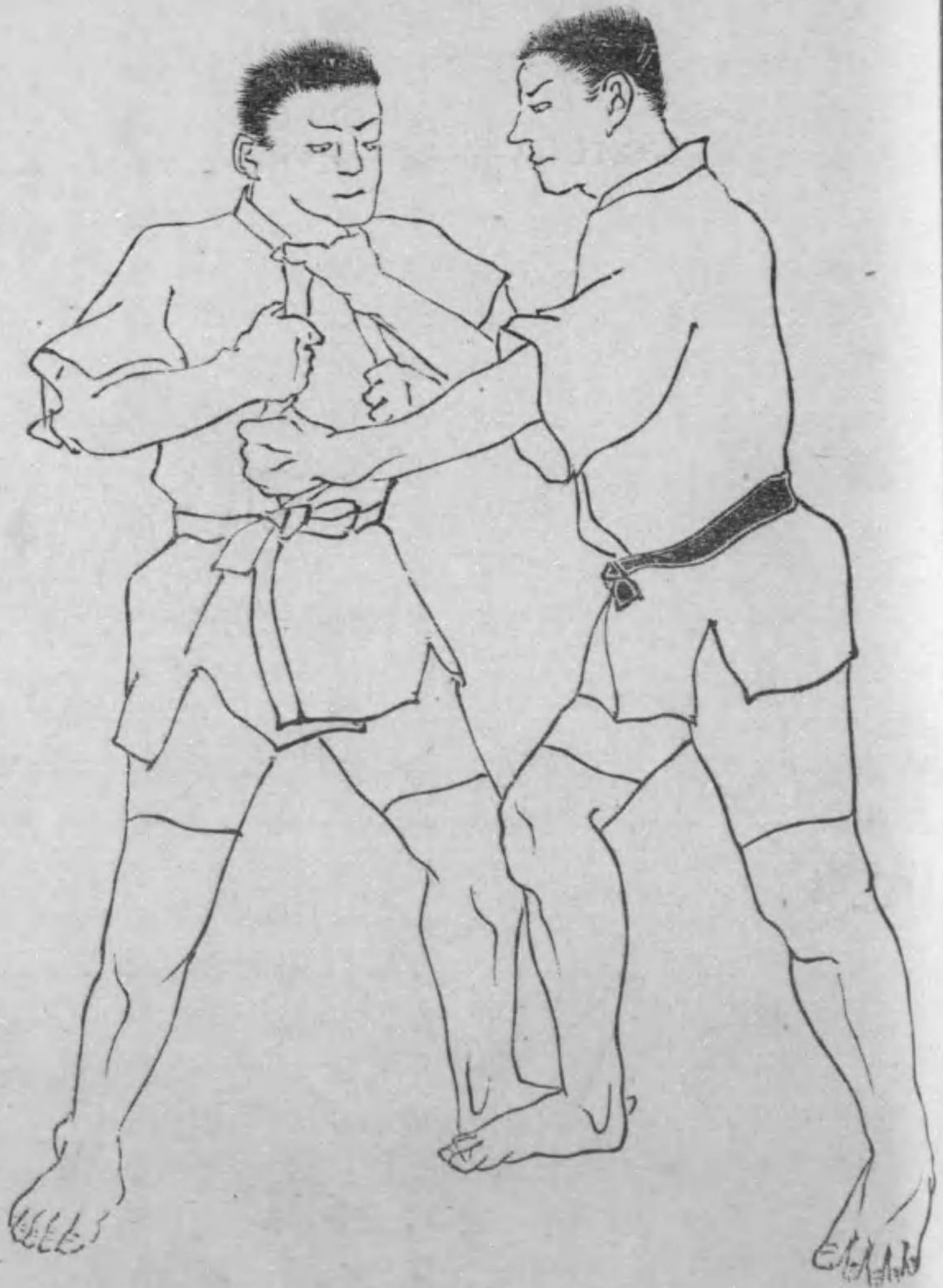
柔術片胸解き圖解

是は我が胸を搔き合はして掴まれたる時相手の眼を白眼ながら
 總身に力を罩め兩手にて相手が握り居る手の下を我が兩手先に
 て我が胸を片方づゝ取り心靜に腰を下ぐると身體は一寸斜めに
 なり同時に臂を張りて開くべし速に解けるものと知るべし締め
 る方は右手が先の時は右足を一步前に踏み出し又左手が上にな
 る時は左足を一步前へ踏み出すなり。

柔術片胸解き圖解

片胸解き圖

解きかき掛けたりる處の圖



柔術片胸解き圖解

柔術突込圖解
突込圖

突込の時きつは早く負く打し

柔術突込圖解



此の突込と云ふは他にもあれど今は臥勝負の場合を説くべし。是は相手の體に馬乗りになつて相手の表襟隅を右手にて取り左手にて相手の圖の如く下襟の五六寸下の處を取り兩膝頭を疊に附けて相手の右咽喉へ右手に持ちたる襟を突き込み左手を我が方へ強く引き附くるなり。相手が私の襟を右手にて掴み左手にて右襟下を取り腰を持ち上げると同時に下より左へ引き倒して跳ね起るなり我は相手の自由を妨げながらに襟隅へ突込みて咽喉を締めるなり。相手も起る事能はざる時は負を示して終るなり。

柔術右腕挫圖解

此の形は諸流何れの派にもある形にて相手より右手を以て我が胸襟を取りたる時其握りたる手首を右掌にて押へて腰を引くと同時に相手の腕を逆に反らして直に我左腕を圖の如く相手の二

柔術右腕挫圖解

右腕挫圖

此の圖は既に挫のく處のなり



柔術右腕挫圖解

の腕の上より巻き込み其手先にて我が下襟を持ち右手へ持ち直して構へるなり。斯して直に腰を下げ總身に力を罩め腕にて下へ押附る時は相手は耐へ兼て負を示すなり。

柔術左腕挫圖解

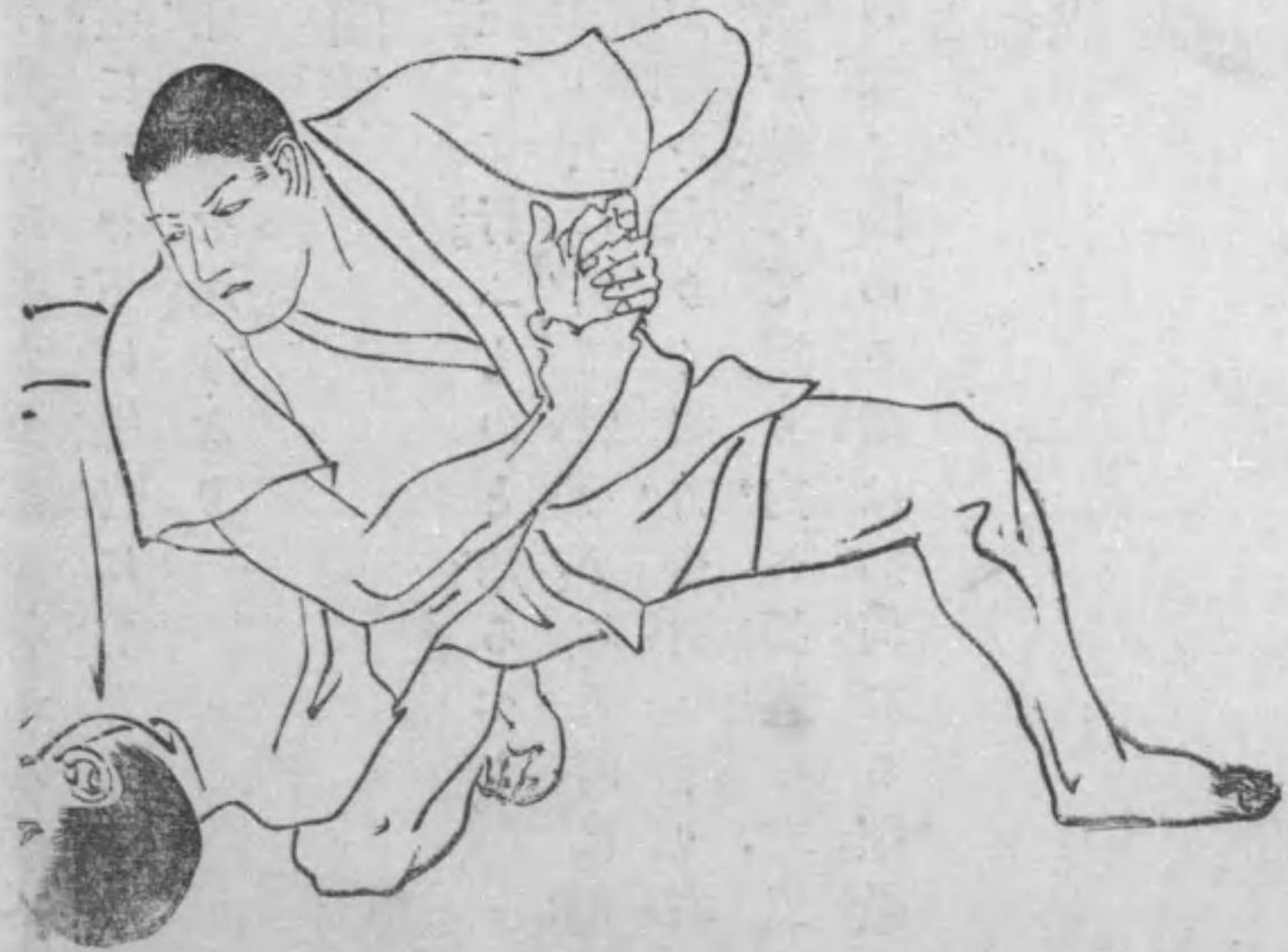
是れは前と同じなれど左にて行ふものと知るべし。我が二の腕を相手の二の腕の上にて當て臂を下げる時は相手は我が思の儘になるなり。我が體を大きく後方へ引き下り右膝を突き左足を立てて手首の甲を我が掌にて握り内へ折込み右二の腕は押附け下腹に力を入れて圖の如く固める時は如何なる強敵も身動きも出来ぬものなり。相手は負を示して終るなり。

柔術左腕挫圖解

左腕挫臥勝負圖

是は先手に力を込めて絞る處なり

柔術左腕挫圖解



二四

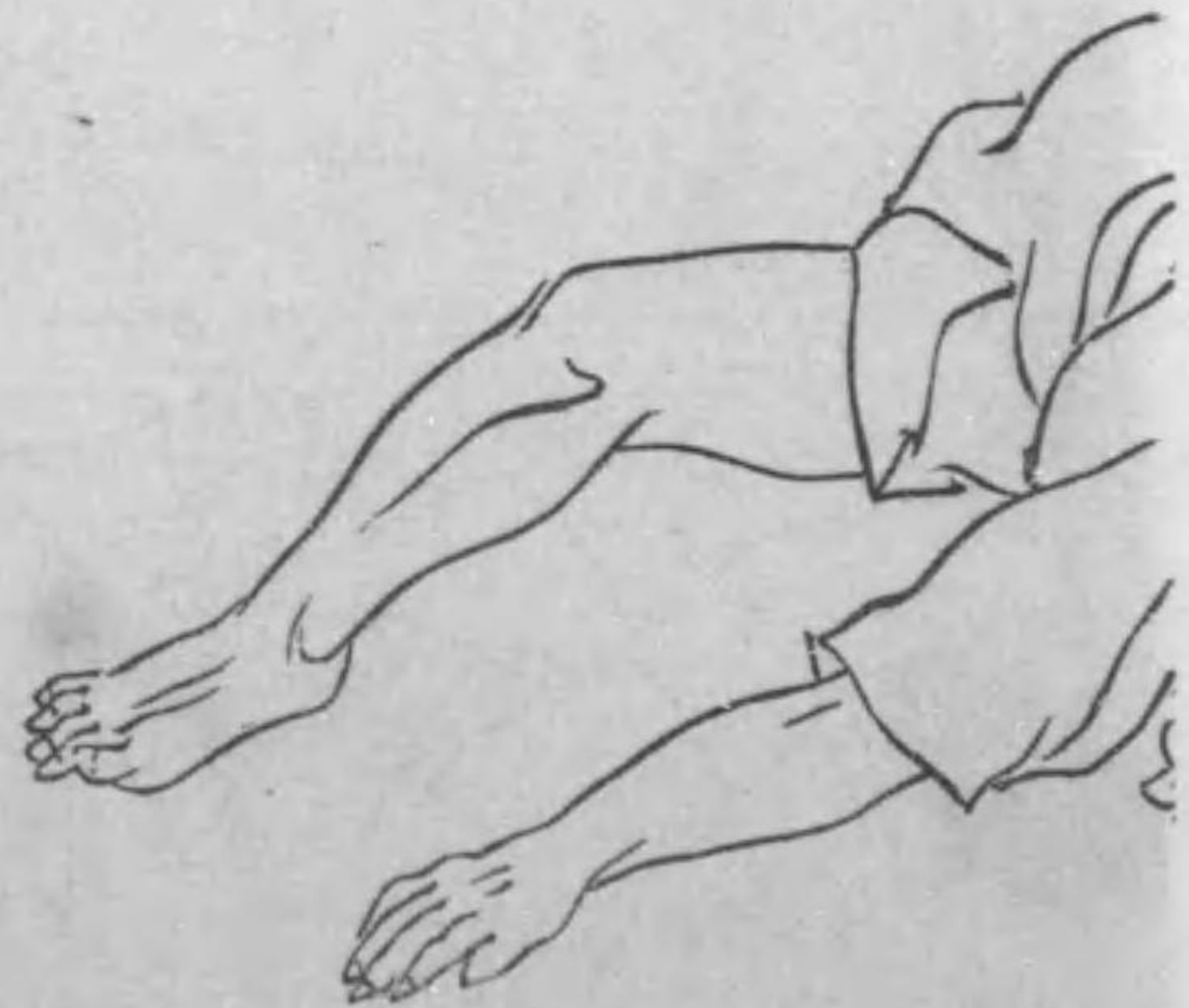
固方能力を圖くを參照すべし

柔術腕挫圖解

我が左手にて相手の右腕を取ると同時に右手を添へ兩足は相手の咽喉の處へ圖の如くに押付け成るべく肩の方へ寄る心持にて兩手を引附けると同時に總身に力を入れて反り身になるなり相

柔術腕挫圖解

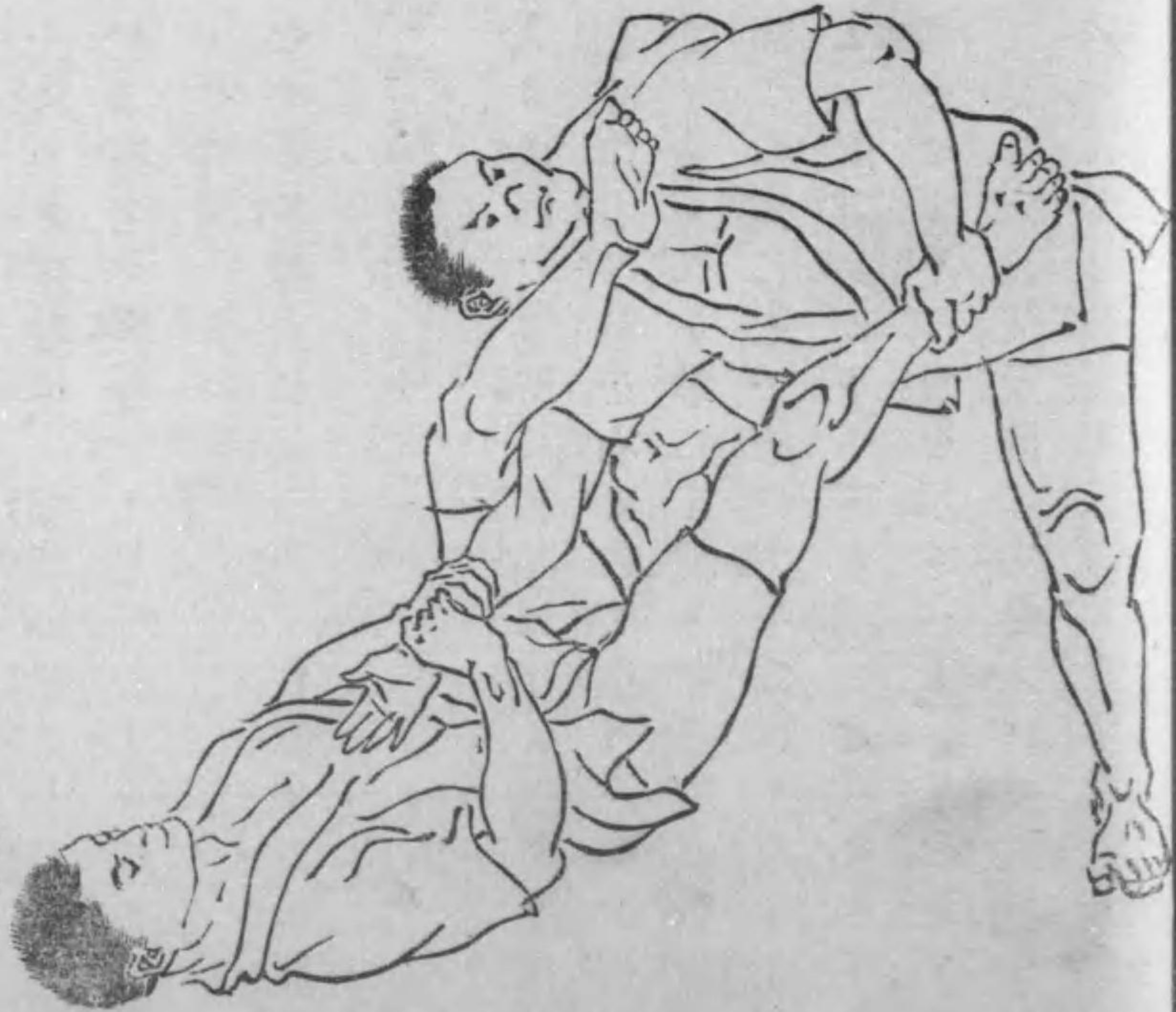
二二五



腕挫第二圖

此の形の腕挫は業の違ひにけだり種類あり

同第二圖解



腕挫圖

此の圖は能く寫生が出来て来るあつて

同第二圖解



手は早く疊を打ちて負を示すべし。圖の如く相手の腕が逆になる故一時の力を入れて反る時は相手の腕が折れる事あり注意を要す。

柔術小手緘圖解
此圖は臀より起き上りたる處なり。相手の足首を左手にて取り挫かれたる右腕は捻り返して逆を直し足先に力を罩めて臀より起き上るなり。此も双方共無理をなする故痛處に氣を附て注意する事肝要なり。

柔術小手緘圖解

是れも臥勝負にて入り亂れたる時に相手は下より業を掛ける心組の處を我れ先に相手の右手首を右手にて握り左腕を相手の右腕下へ差込で圖の如く我が腕を掌にて握り相手の左脇腹より上に乗り掛り相手を起さぬ様にして腰に力を入れて左手先にて我が手首を持ちたるまゝ兩方共に下へ押し附るなり。相手も此業に掛りたる時は無理をせず早く負を示すべし。是を返すには相手の腰帶を左手にて持ち左足先及腰に力を入れて跳ね起されば解ける事あり。講道館にては腕緘と云ふ。立勝負にも此形あり

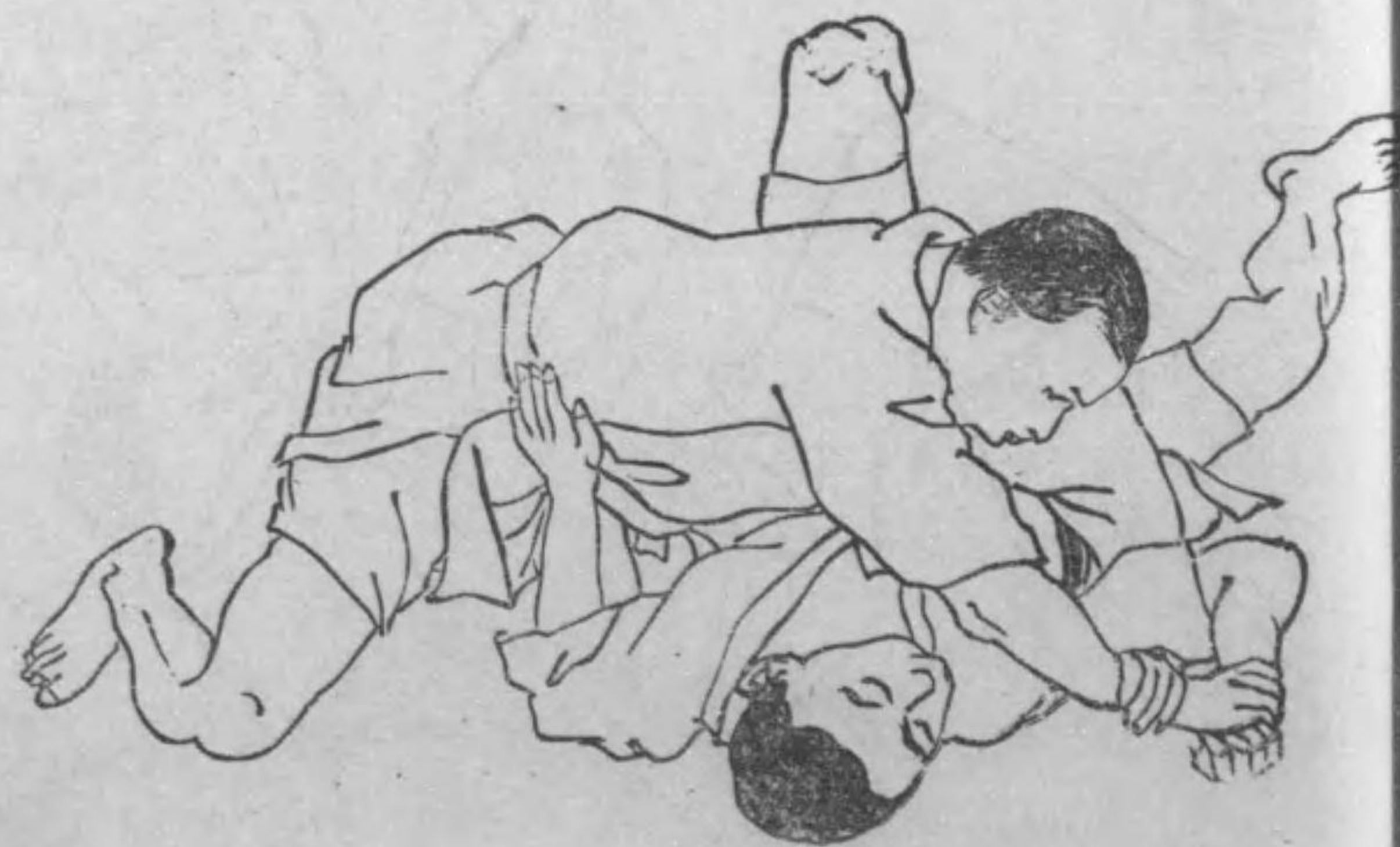
小手緘圖

圖を能く参照すべし

柔術膝固圖解

双方臥勝負に成りたる時我相手の右側に在りて相手の仰向に臥して居る襟元を兩手に攪み右膝頭をば相手の水月に押當て左膝

柔術膝固圖解



膝固圖

此の圖の如く固める時は大槪ぬけられしと者るれ

柔術膝固圖解



を立て四肢に力を入れ引締る時は相手は耐へ得ずして負を示すべし又圖の如く我が左足は相手の頭の先へ爪先が出る位が能く利くなり。膝頭は押付けて固め兩腕は總身に氣を罩めると同時に引締る事を肝要とす。相手も是れを返すには左掌を以て左より右へ押拂ひ除けると共に足先に力を入れて跳起さるなり。

柔術胸締圖解

押へ込みたる相手を下より締め勝を取るは此の胸締に限ると知るべし。圖の如く相手は充分我が兩襟を取りて咽喉を締るなり。我は兩足を開き兩手にて相手の襟を取り胸の處へ引附ながら咽喉を締ると同時に相手に相手の兩脇腰を兩足にて挟み腰を延ばすと同時に胸を締めるなり。一時に急に締る時は骨を折る事あり注意すべし。是れを返すには下腹に充分に氣を罩め相手の片足を解けば逃れ

柔術胸締圖解

柔術足緘圖解

足緘圖

第一圖に足緘のしめしながきへ
第一圖に足緘のしめしながきへ

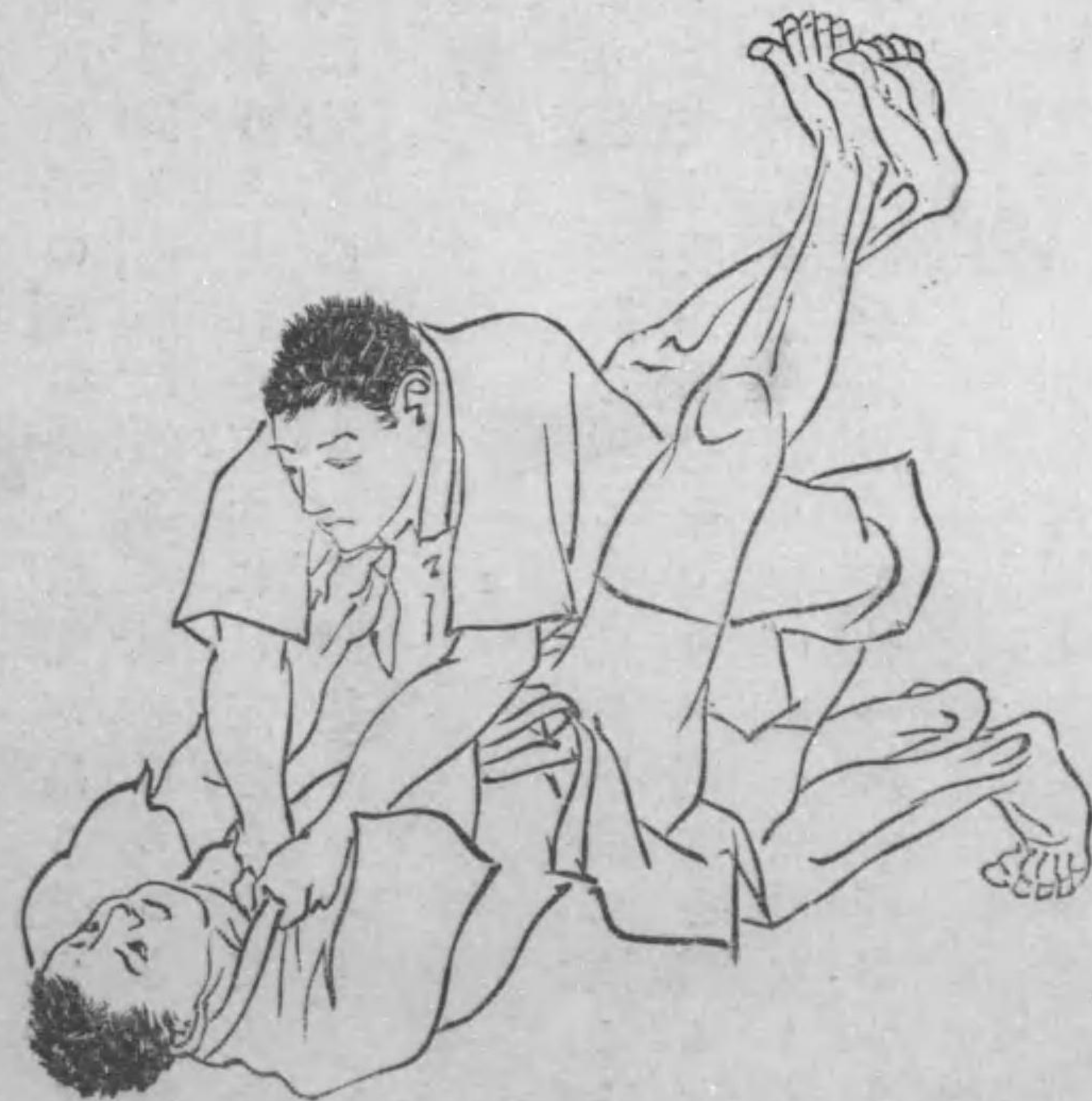


此の足緘と云ふは下より業を爲すものにて我は仰向に成ると相
手は是れに附入りて襟締等を試みんと左足を我が左脇へ突きた

柔術足緘圖解

胴締圖

此の形は圖に能く参照し



得るなり。柔術胴締圖解
足緘又は絞り足とも云ふ。

を掛け来る時我は直に相手の右足首を右腕にて抱き込み左掌を
向臍の處へ當て右手先を我が左手首の處へ當て圖の如く下腹に
力を入れて相手の足首を逆に成る様に兩手先にて固める時は相

柔術足挫圖解

二二五



足挫圖

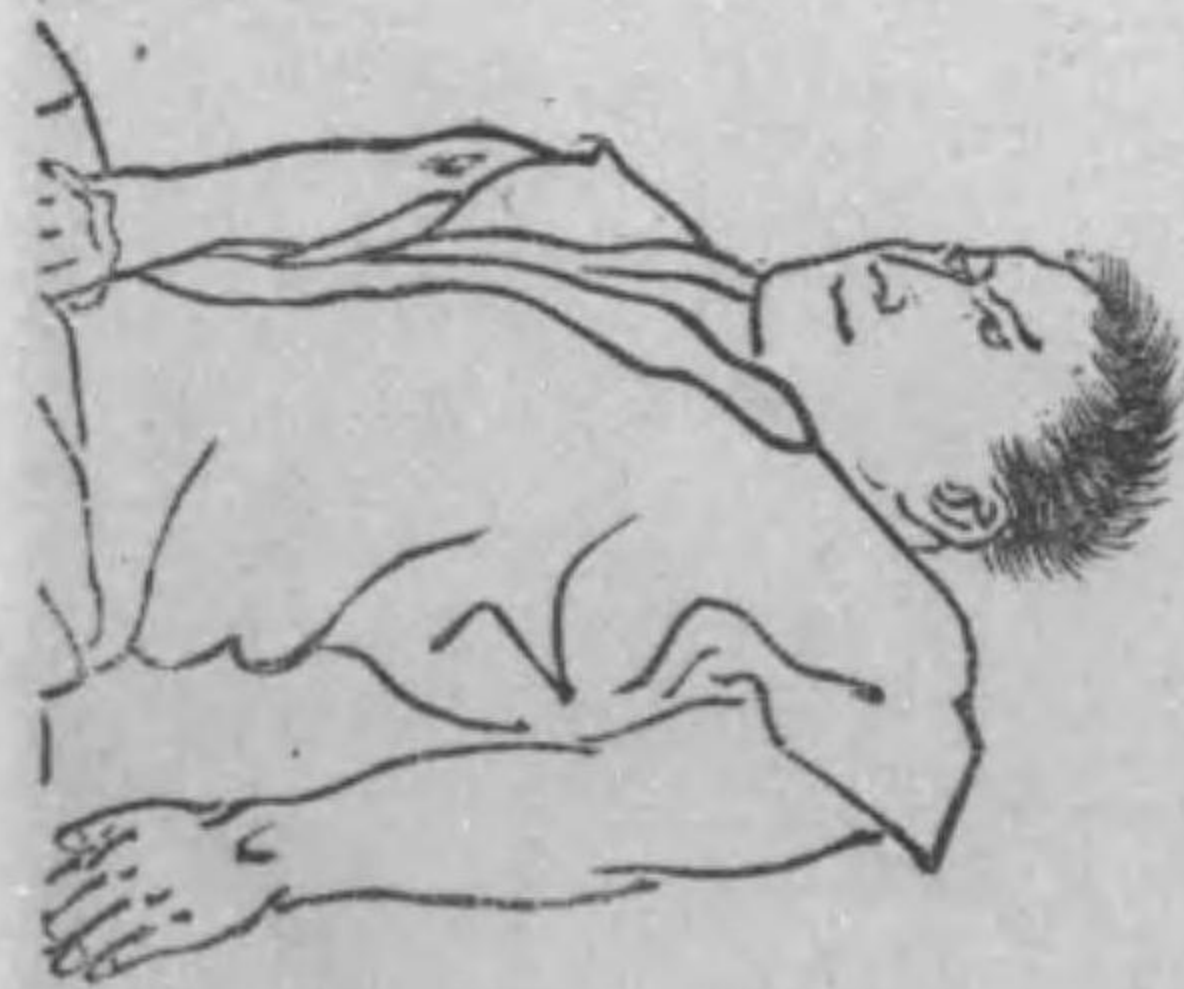
此の圖は能く參照すべし

柔術足挫圖解
此時我は右足を以て相手の股の上より廻して左足の草靡の所に
當て左足先を添へて相手の左足を固めると同時に右手にて體を
我が胸へ引附け左手にて相手の右二の腕を巻き込みて締るなり。
是は足の門とも云ふ次第なり。

二二四

柔術足挫圖解

此の臥勝負は相手は仰向に倒れ居て足先を以て我に掬ひ拂足等



十字絞圖

此の寫生本文に於ては、今しるに既首に
さげ指先より分手に掛たりゆる
縮るかにか處をを見せたる者なり

柔術十字絞圖解



二二七

柔術絞業解説
手は起上り得ず負を示すなり。

柔術絞業解説

此の絞業は固業よりも危険にて締め居る内に相手がいつか呼吸が止り居ることあり故に人工呼吸術又は活法にて蘇生せしむるなり。
上達してより絞業を用ふるは自由なれども初心の者は教師及先輩の者の同席無き時は逆手絞業は掛けざる様心得べし。昔の柔術界にては逆締等最も流行せしも現今は一般に投業を専門とする傾向なれども流儀に依りて逆又絞業を専門に教へる所もあるなり他流と組討をする時は先づ逆又絞業を以て施す是を受る心得が無くても如何と思ひ著す者と知るべし。

柔術十字絞圖解

二二六

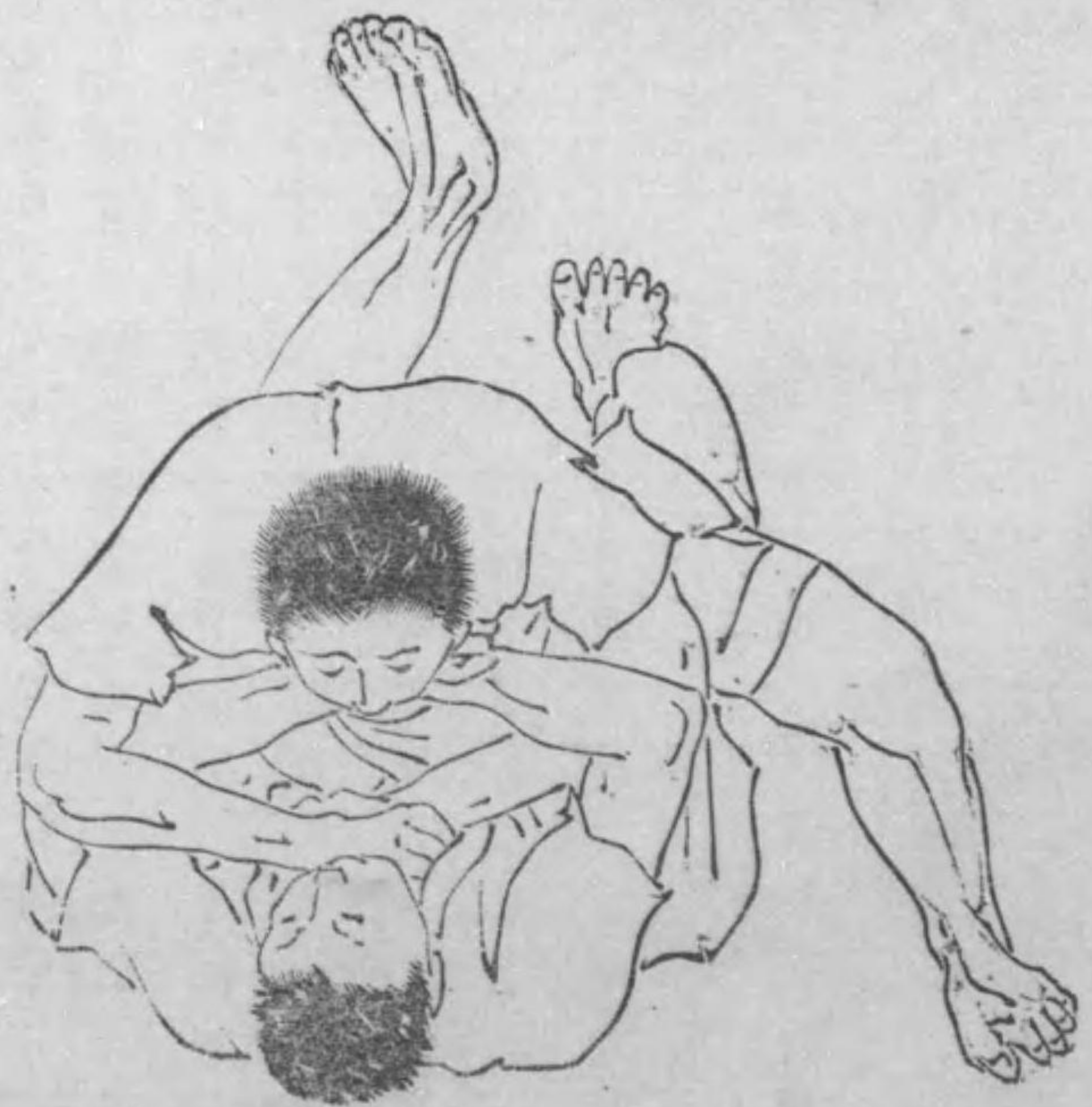
是は相手が仰向に倒れたる腹の上に馬乗りになり。兩膝頭を疊に附けて兩足先を爪立て臀を相手の臍に押當右手にて左肩の襟を握り左手は右肩襟の處を同じく小指より順次に力を入れて攪み咽喉に我が顔を少しく横に向いて兩肘を張り總身に力を入れ、て十字字に締る時は必ず相手は締められて假死するなり。是れを外し逃るゝには相手が兩肘を疊に附けて締附る迄に下より兩掌を以て相手の兩臀頭を押上ぐと同時に下腹及兩足先に力を單めて跳ね除けるなり。襟を深く取りたる時は腕先にても締めらるゝも淺く取りし時は兩臂を疊に附くるまでに絞るべし。

柔術雙十字絞圖解

上なる者は兩膝を突き居る時は横に倒され易き故圖の如く左片足先に力を入れて立膝を爲すなり。此の圖は下の方が充分に手

雙絞り圖

互角の者の組打に勝ては下は成る者上は氣を手にしべる



が取りあれば下の方の者に勝ある様に見ゆるも上の者が七分の徳あり上の者は下より締られ又は跳飛されぬ様するなり。上に

綾絡締圖

乙者は右手にて甲者の襟首を握り、甲者は右腕にて相手の左襟元を取り、左手は左脇下へ差入れて相手の右肩口の稽古衣を握り、左膝を疊に突いて足の爪先を立て居るなり。



柔術綾絡締圖解
ても下にてても充分に締めたる時は樂なる方へ顔を横に向けて居るべし。

柔術綾絡締圖解

我は相手の背に廻り右手にて相手の左襟元を取り左手は左脇下へ差入れて相手の右肩口の稽古衣を握り、左膝を疊に突いて足の爪先を立て居るなり。
右足は立膝を爲して頭をば相手の左肩へ押付けて兩臂を張り總身に力を罩めて締るなり。
此の手に掛りたる時は逃るゝ術なければ速に負を示すべし。

柔術右後絡圖解

我れ相手の背部に廻り右腕にて相手の右胸を外より巻き込み手先にて稽古衣の紋所を逆に握り左手は可成相手の左脇の下へ寄り右肩口の襟を取るべし。然して左足を大きく後方へ引いて膝を突くと自然に相手の體が崩れて後方へ倒るゝなり。其時に右膝を立て下腹に力を罩めて兩手先を以て締るなり。乙者は前と同じ。

柔術右後絡圖解

左後絡圖

挿畫の如く縮める處の構へより
一歩後下より縮くしるべし



我が左腕を相手の左脇の下より差入れて直に襟首なり又は紋所

柔術左後絡圖解

是も前と同様なれども左右の違ひだけなり。

柔術左後絡圖解

右後絡圖

本文の如く十分に圖に參考し



柔術右後絡圖解

裸體捕圖

此の掛口の圖を能く參照すべし



柔術裸體捕圖解

柔術裸體捕圖解

二三四

の處を早く取り右手を以て左肩の襟元を取り圖の如くし直に左足を大きく後へ引きて膝を突き立て足先を爪立て右膝を立て同時に両手先にて締るなり。

前圖及此圖は讀者の解し易き爲に肩口より寫生したり。

柔術裸體捕圖解

此の裸體捕と云ふは手數種々あれども今は其の一を説くべし。

他は之を應用したるなり理は同じと知るべし。

我は相手の背部に廻り直に右腕を右肩口より咽喉に掛け左腕を左肩へ掛け掌を以て相手の後頭部を押へ右掌にて我が二の腕を握りて相手の身體を我が胸の處へ引附ると同時に腰は其儘にて大きく左右足を後方へ引き下ると共に左掌を向へ押附ければ相手が此れを解く術なく咽喉を締め附けられ早く負を示すべし。

左右とも能く利く捕方なれば勝手宜き方を早く掛るべし。

柔術當身の解説
是は稽古衣ぬげて裸體になる時の形なり又真揚流に裸身捕と云
三種の形にもあり。
是れは如何しても解く事のできん形なるゆへためして見るべし。
亂捕の形は此位にして置又教師用には成文明細に記べし。

柔術當身の解説

柔術を學びて初傳目録免許皆傳を許されたる者は皆殺活の法を
知得せるなり。當身と云ふは唯圖を見或は假初に聞きし斗りに
て猥に他人に此法を行ふも其効なきものなり故に師範より此者
は初段の業有者に誘の活を許すとか五級の腕前ある故に何々の
活法を許すと云ふ様に襟活法陰袋活法を許し段級の進むに隨而
目録免許と順を追ふて術の奥儀を習得するなり。されば僅か柔
道の初手を學びて最早一人前の柔術家に成りたると思ひ猥りに
術を濫用し他人に迷惑を掛るは甚だ心得違ひの極めなり。

本書は全部参考として能く教へ能く戒めたり。此の書を常に讀
み學びて其長を取り其の短を補ひて新に工風して天晴天下の名
人となる様心掛くべし。

義 爲

習ひたる業をみだりにあらはすな

おのがいのちの瀬戸際にせよ

同 人

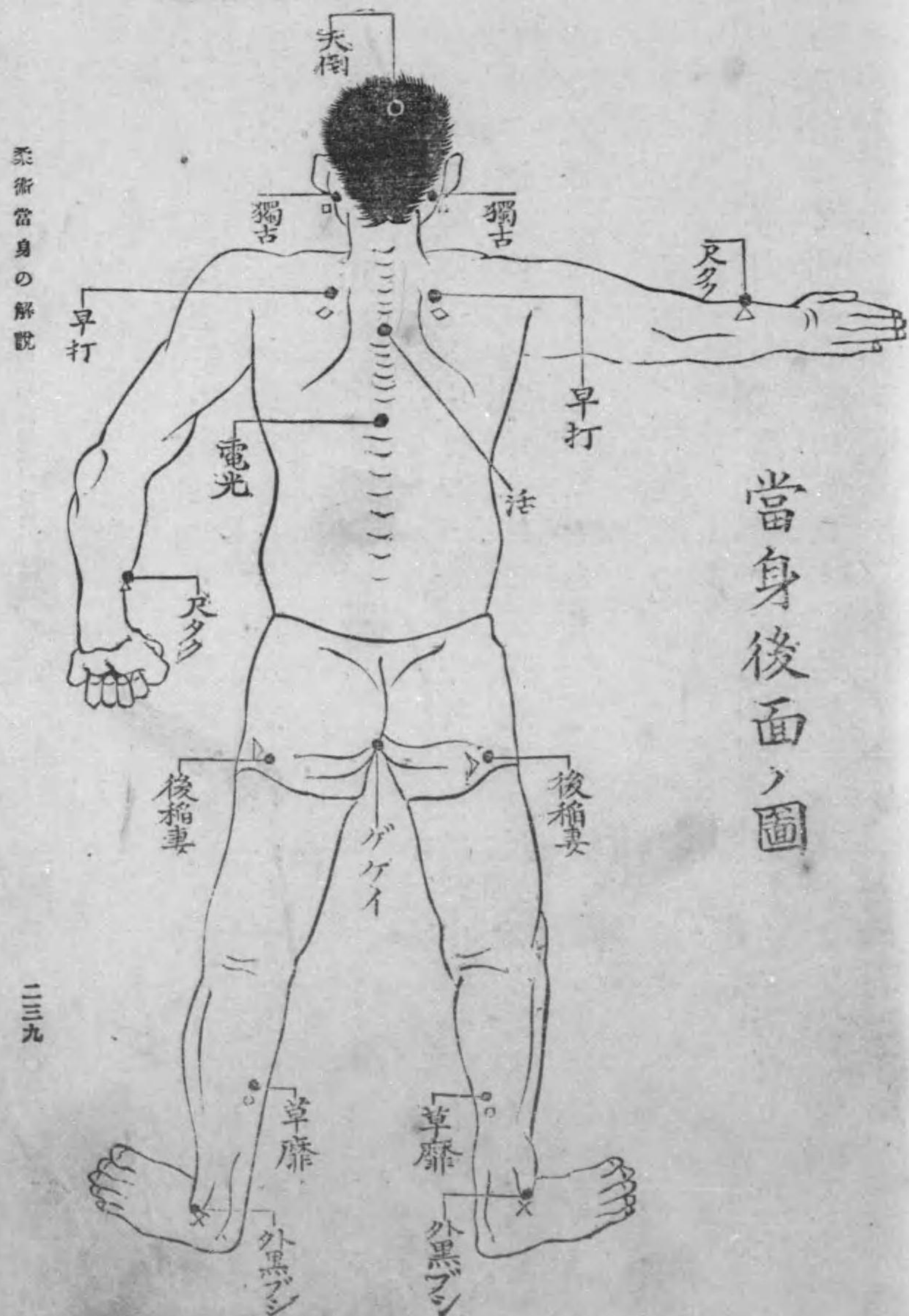
國の爲め己がためなり身を護る

ほかに無益の腕立てをすな

真揚流 古歌

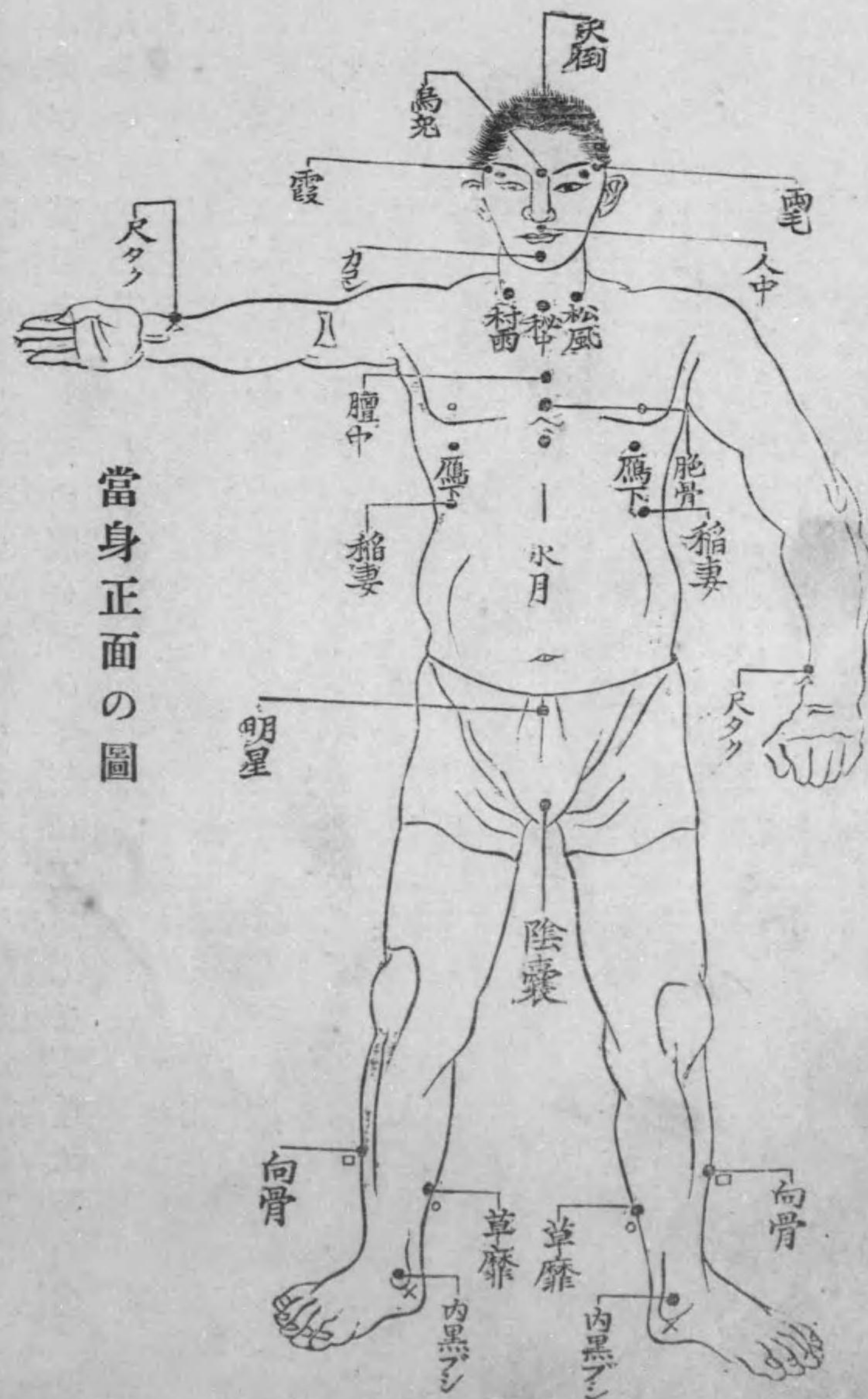
我が上に立つ藝術を苦にやむな

すきの道こそ上手なるべし



當身後面ノ圖

柔術當身の解説



當身正面の圖

柔術當身の解説

柔術當身圖解

此の當所及其名稱を常に能く暗誦して同志の友との談話中にも必ず定めある此の名稱を用る事を怠るべからず。

正面の部圖解説

天倒、烏兔、霞、兩毛、人中、カツコン、秘中、村雨、松風、臙中、脆骨、膈下、稻妻、水月、明星、陰囊、向骨、内踝、草靡等にて兩腕先は尺タクと云ふ又松風の處を流派にて風月と云事もあり。

後面の部圖解説

天道、獨古、早打、活電、光後、稻妻、ゲケイ、草靡、外踝、尺タク等なり。以上の當所にて死活を自由に爲すは柔術家の秘法なり常に當所を覺へ居りて萬一の時に施すものと知るべし。以下順を追ふて解説すべし委しくは後日教師用として出版す。

天倒

天倒及天道とは前頭骨の部を云ふ天道は頭の頂上にて天倒は小兒の俗に踊子と云ふて頭腦へ脈を打つ所を云ふ。天道を強く打つ時は頭の三大骨が開きて絶命す。蘇生の術無し。天倒を打ちて卒倒したる時は呼吸術又は誘の活にて蘇生す。心臓に達する大切なる急所なり。

烏兔

烏兔は顔の中心兩眼の間鼻の上部の處を云ふ。是を當てる時は眼眩て卒倒す。此の所より一寸位離れし處を打つても鼻血を出すほどの大事の急所なり。

人中

人中は鼻と上唇の間の真中を云ふ極めて大事にて強く打ち當る時は呼吸術又は活法にては戻り難し顔面動脈神經鼻骨上顎骨三叉神經神機紛擾呼吸妨害神經戟衡等の原因に依るなり是大事の殺なり必ず慎べし。

カツコン

カツコンと云ふは腮の上と唇の下の處を云ふ此の當も人中と同にして蘇生の術を施すも其効無し原因は前と同様なり。

霞

霞と云ふは顛顛骨俗に米嚙と云ふ處なり是に當る時は腦髓反劇諸神經攪亂の原因にて卒倒するなり。

兩毛

兩毛の當は前の霞の當と共に形に能く用ふるなり。此の當は兩眼尻の所にて霞より一寸下の處なり。此の處を當る時は前と同様にて卒倒するなり。

獨古

獨古は兩耳の後の處なり。是も形の時に多く用ふるなり耳朶の裏の處なり此處を當るときは耳筋の起點と後腮の間を強壓する原因にて血管及神經を壓迫すればなり。

秘中

此の秘中と云ふは形に於ても亂捕にても固締業にも能く用ふる第一の殺處なり咽喉の真中胸骨部の上なり氣管を壓し呼吸器を

兩毛、獨古、秘中

松風村雨、膈中、膈下
害し隨而肺臟等に其の累を及ぼす故卒倒するなり。

松風村雨

松風(風)月と云ふ流派あり。村雨の當は肩胛舌骨筋の左右の處圖を見べし。右を松風と云ひ、左を村雨と云ふ。是大事の殺なり。

膈中

膈中と云ふは俗に水落と云ふ處なり。此の當は胸部胸骨の眞中に是を當る時は神經震盪、血行遽變、呼吸氣絶に依り卒倒す然れども誘活、心臓活裏活、襟活にて蘇生するなり。

膈下

膈下と云ふは兩乳の下一寸餘四方を當るなり。氣絶の原因及活法は前と同様なり。

稻妻

稻妻と云ふは浮肋骨部左右を云ふ俗に肋の三枚目と云ふ處なり。氣絶の原因及活法は膈中と同様なり。

水月

水月は胃腑胸下端心窩の眞下を撃つなり。神脈を刺戟するより反腦神經平衡脈の三原因にて氣絶卒倒す。活法は人工呼吸術にて蘇生す。是れにて蘇生せざれば裏活又は誘活にて復活するなり。

明星

明星と云ふは臍の下一寸餘四方の處を突當蹴なり。大腸小腸及膀胱の二腑を劇格して絶息するなり。襟活、陰囊活、裏活、人工呼吸術にて蘇生す。

陰囊

陰囊の當は俗に云ふ畢丸を蹴り或は突き爲めに膀胱直腸畢丸交感神經系動脈等に害を受け絶息す陰囊活を施すべし畢丸環が腹内に入るあり大事に圍むべし。

向骨

向骨を當る時は唯總身に痛を感ずるだけにて絶命することなし萬一氣絶したる時は誘の活法を施せば蘇生す

草靡

草靡の當と云ふは俗に土不踏と云ふ處と圖にある如く「フクラツバギ」をも草靡と稱す處を當てるなり是を當てる時は全身に痛みを感じて倒るゝなり。

内外踝

此の踝と云ふは向骨と同事にて頭腦へ迄も痛を感じ絶命せざれども萬一氣絶したる時は誘活を施すべし。

早打

早打と云ふは針醫が肩の強く凝りたる時早打と云ひて針を打ち往々死に至らす事あり其時は胸中を摩り誘活襟活を施せば効あり之に當るときは腦髓肺及肋骨等に害を及ぼし絶息するなり猥りに針を打すべからず大事なり。

活

此の活と云ふは背骨第一骨より六七番の間の男子は左寄り女子は右へ寄りし處なり。此の活法は惣活法十三活の内一番多く用

内外踝、早打、活

電光、後稻妻、下閨
ふる活なり。

電光

電光と云ふは(一)背の第三推を當てる時は肺臓に感ず(二)背の第五推を當てるときは心臓に感じ(三)背の第六推に當る時は背髓中樞の激動に由て卒倒するなり。

後稻妻

後稻妻と云ふは圖の如き處にて是を當る時身體痛みを感じ倒るるなり。此處へ陰囊活法を施すなり活法の部に委しく説くべし。

下閨

下閨と云ふは肛門の處なり是れに關する説明は最も柔術家に必用に付卷中活法の部にて詳細に説明すべし。

尺澤

尺澤と云ふは形に於て活用する處多し。撓腕長伸筋と總指伸筋の間を壓するなり。斯くすれば神経を刺戟し痛に耐へずして卒倒す。撓骨神經尺澤神經筋膜に痛を感じるものと知るべし

柔術活法の心得

凡そ呼吸術を活用爲さんと欲する時は第一に心を靜にし形を稽古すると同様の態度にて事に當るべし。道場に於て稽古中假死したる者は勿論絞首溺死高所より落下したる者及馬電車より落ちて人事不省となり又は産前産後血の爲めに假死したる者等は總て此の活法にて蘇生するもなり。活法を施すに當りて精神知覺運動の三機は勿論呼吸血行體温等を能く調べて掛るべし。

尺澤、柔術活法の心得

此の法は近來各醫家柔術家及警視廳に於ても實施しつゝあり。醫帥の來る迄間に合ざる時此の呼吸術を以て蘇生せしむるなり故に素人にも解し易き様挿畫を以て説明すべし。前にも述べた

柔術活法の心得

迄下乳兩りよ下の臍は者甲
處るた上り摩で
しべる摩てに處の點●の掌



工人呼吸術第一圖其の一

縮を手と(一ヤ)は者乙
りな處るめ



假死者は全身冷へ氷の如くなり居るも脇の下に少し温度ある時は必ず蘇生するものなり。人體には八結と云ふて八つの穴あり即ち兩眼耳鼻口肛門を云ふなり。今此に人工呼吸術を詳細に説明すべし。 二五〇

一とす。急死は必ず骨が堅き故關節骨を折りては施術者の不覺

柔術活法の心得

迄下臍りよ下胸兩と(イエ)は者甲
處るす下り摩



工人呼吸術第一圖其の二

先手兩と(一ヤ)は者乙
處るたし延引を



柔術活法の心得
如く死者の身體冷却すれば全身堅くなるもの故甲者は假死者
の胸を兩手摩擦し全身の骨を次第に柔かになして乙者が頭部へ
廻り兩手をもちて我が兩股の處へ假死者の頭を圖の如く爲し
甲者は假死者を仰向に寝かせ全身を能く摩擦し柔はめる事を第

なれば能く心得て術を施すべきなり。
死者兩股の處へ勝がり甲乙者共に兩膝を突き爪先を立て甲者よ
り乙者とかはり、氣合を掛けるなり即ち甲者がエイと掛聲を
發しながらいふ、兩手にて挿畫の如く兩乳下より臍下迄を摩り下すな
り乙者は甲者がエイと聲を發して摩擦したる其手を縮めたる時
(ヤ)と答の聲を合せて數回爲す内必ず蘇生の氣味が見ゆる故其
時は氷水なり其他氣附の薬を口に入れ冷水を顔に吹き掛けるべ
し素人の蘇生法は此に限るなり。氣の附きたる時は靜に床を
取り寝かすべし其時に軒をかきて長時間寝るものと知るべし。
稽古中假死したる時は五六分乃至十分間位にて蘇生するなり氣
が附きたるときは拳を以て死者の背部活所を一つ強く打つべし。
又絞首は二十分位の間に經過して蘇生術を施したる時に必ず前
に述べたる如く廿四時間位は軒をかきて寢て居る故一二時間毎
に度々名を呼びて起すべし。

柔術活法の心得

食物は牛乳を熱くして與ふべし地方にて牛乳無き所なれば薄き
粥を與ふべし。
施術者は精神を死者の身體に集中すること即ち熱心事に當るが
肝要なり。

人工呼吸術

人工呼吸術を以て蘇生爲さしむるには輕き假死者は前の如くに
て容易に蘇生すれども重き首絞り等は術者が充分に氣合を罩め
て假死者の指を延ばして甲乙兩者共に仰向に臥して圖の如く兩
手首と兩足を持ちて双方聲を揃へて(エイ)と云ふ時には兩手足と
も縮める事(ヤ)と云ふ時には又引延ばし死者の顔を見ながら斯
くすること數回行ふべし頭の方に廻りし者は死者の頭を兩股に
て耳に觸れぬ様に挟み圖の如く兩膝を突き兩爪先を立て全身に
氣と力を罩めて術を施すべし。又乙者は足の方に廻り是亦甲者

人工呼吸術

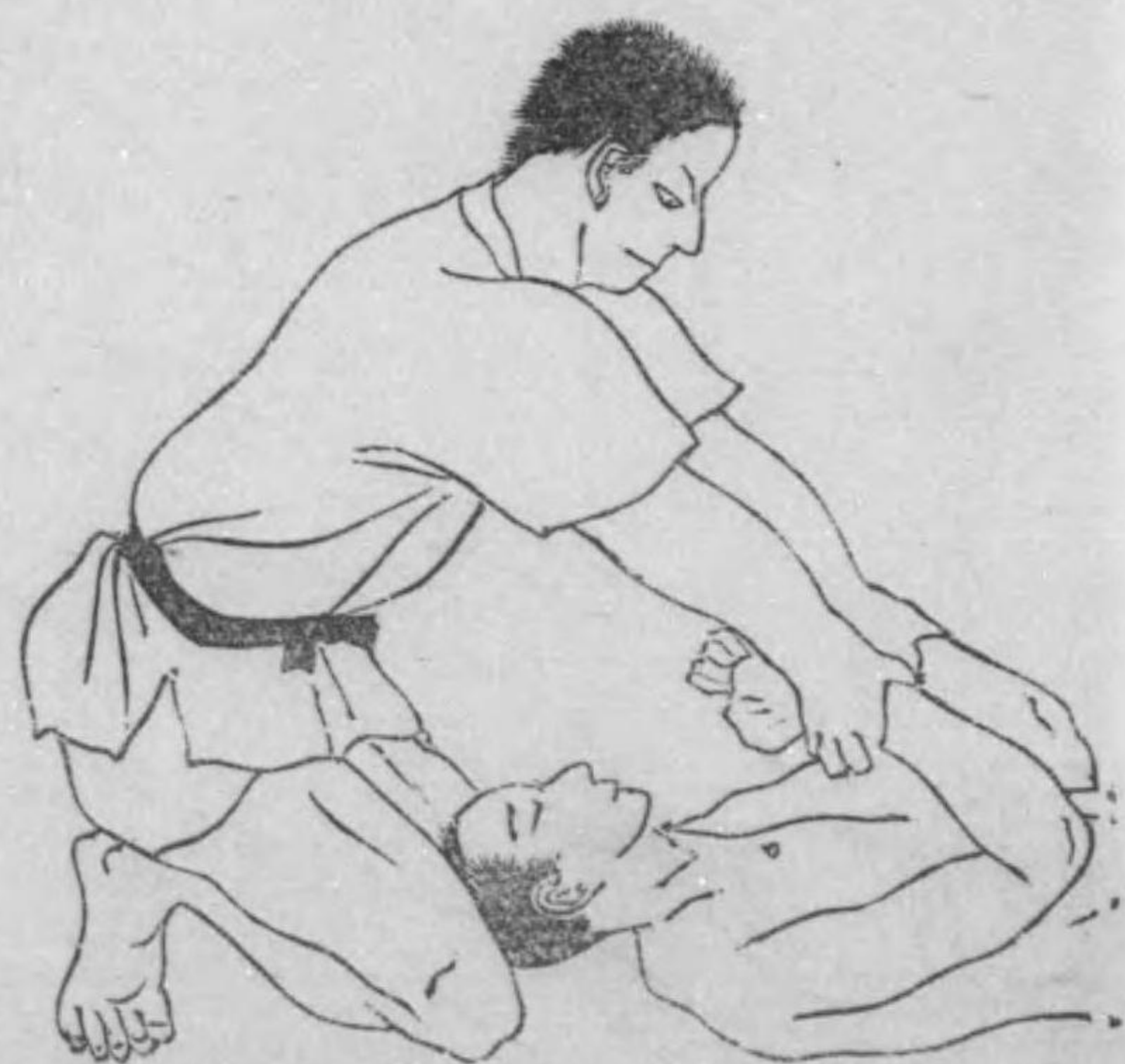
工人呼吸術第二圖其一

乙者は一ヤと兩足を編るた處なり

人工呼吸術



甲者(イエ)と兩手縮めため
處る



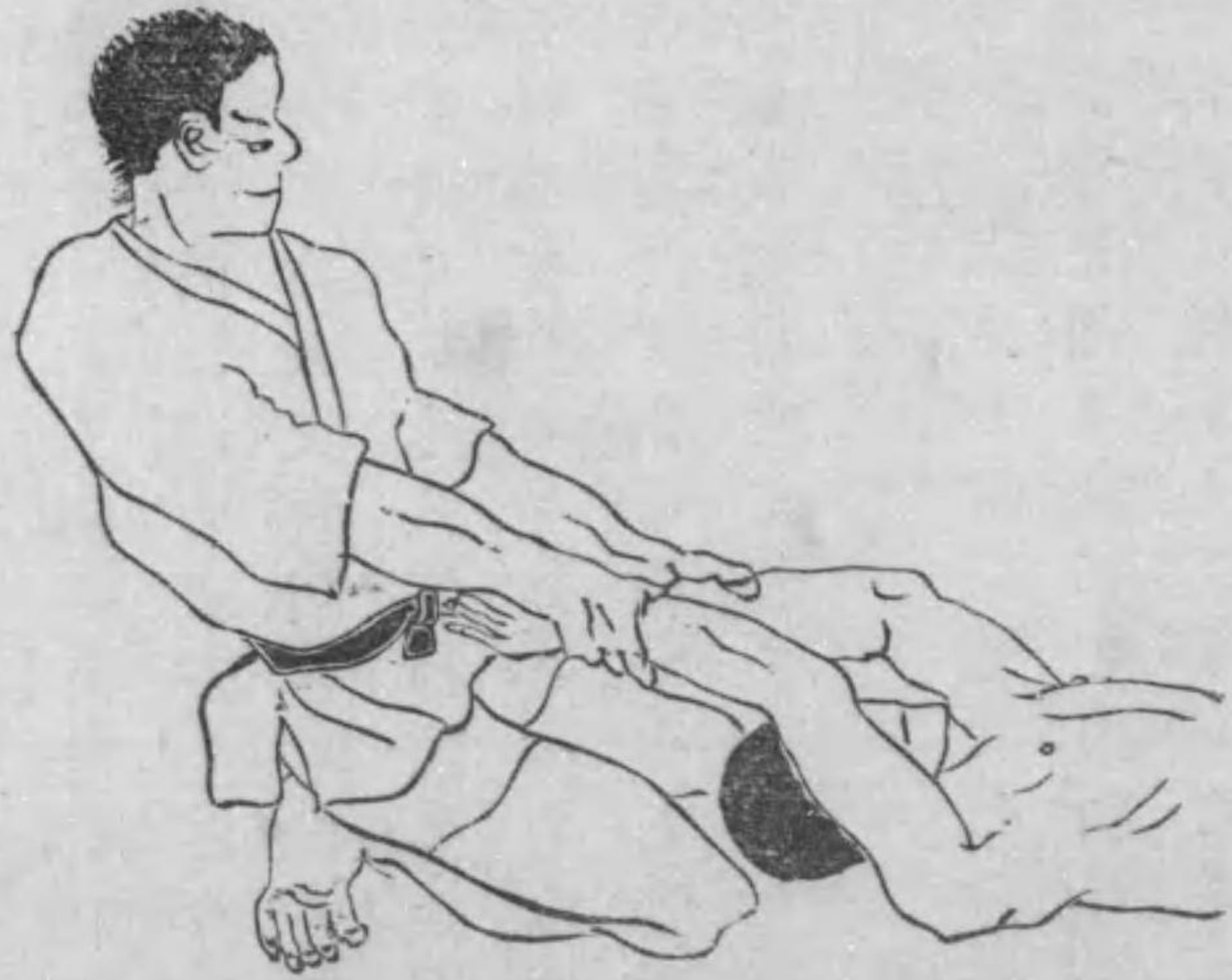
と同様の心得にて掛るべし。輕き假死者と云へ共氣と力の單らぬ時は術を幾度施すも其効なし。絞首其他の變死者を見て驚き術を施すに當り周章るべからず斯る時は術者水を呑みて心を落附て然る後術を施すべし。又蘇生すべき者も術者の不注意にて

人工呼吸術

たる者及病中にて絞首其他の事變にて假死したる者は活法にて
も蘇生し難し。

人工呼吸術

處るたし延引を手兩と(イエ)は者甲



工人呼吸術第二圖其の二

乙者(ヤ一)と兩足を引のしばたる處なり



人工呼吸術
復活せざる事あり。活法呼吸術は十中八九迄は必ず蘇生するな
れば充分注意して掛ることを心掛べし。然しながら永く病氣し

呼吸術の秘法

既に大略は前にのべたる通りにて其効を見るもあり又此術を施すは甲乙者が手早く術をなすべし第一に死相中に眼中の色を見れば他殺の首締をなした時は眼の環が上に有り又自身に首を絞る者は眼の環が下の方にあり又後門を開き見て假死者が開口より大便をなし居る時は十中の七八迄は蘇生せず成共早きは其効あり十分位迄の分は必ず生ると知るべし水死も同事なり水死者は第一に呑たる水を吐して術を施すべし假死者の時間は前と同事此の施方は柔術解剖圖解書に著す者なり。

誘活法の圖解

此の誘の活法と言ふは諸事に用る活にて最初に許す處の活にて圖の如にして假死者を仰向に寝かして其身にふれぬ様に又がり

誘活法第一圖



誘活法の圖解

誘活法の圖解
 二六二
 胸部をなで四肢を揃て静に抱起して第一の高骨に中指を押當第
 六七部の骨の左側を挿畫の如くに掌にて強く當るなり其時に中
 指先を放べし此時術者は總身に氣を満て我が生氣を假死者に移
 心持にて充分に下腹に氣を込て(エイ)と掛聲と共に施術をなすべ
 し其効能實に神の如し此の形は極舊式なるも未だ此形斗り用ふ
 る流義もあり。

誘活法第二圖

兩掌を以て兩胸の乳下の
 處の字なりに能く摩りて
 後引上る處なり



故に著者は此に第一誘の活法として著す處なり。

誘活法第三圖

誘の活法を用ゆる處に
 して(エイ)と聲を掛る
 處なり



誘活法の圖解

誘又の活法圖解

此の活法は假死者を仰向に寝かせ兩足を揃へて靜に半身に起し
術者は背部に廻りて右膝頭を背骨中部に押し當て左足爪先をば
左斜に踏み出して圖の如く構へ假死者の活處の二三寸下の處に
我が右膝頭を當て兩掌は第三圖の如く能く胸水月の處を摩擦し
て死者を少しく俯向かせ(エイ)と發聲と共に右膝頭は活處迄押し
上て強く當て其切に右爪先に力を入れて術を施すべし兩手を兩脇
の下より引上少しく仰向に爲す心持になすべし。
此の活法は何にも一番多く用ゆるものなり講道館にては初段に
成らば此の活を許すなりと又町道場に於ては五級になる時は許
されるものなる故折紙の價値は充分にあるものと知るべし。
充分に練習して後術を施すべし銘刀も切手が未熟にては木劍も
同様なりと知るべし。術を施すに當り假死者の肛門を開き見る

へし締り縮まり居る者は必ず此活法にて蘇生するものなり。又
 口に手或は小鏡を當て息が少しにてもある時は早速に術を施し
 一回にて利かざる時は何回も施すべし。絞首等は手早く死者を
 下して仰向に寝かし其全體を摩り繩紐の跡附きたる處へは水に
 て能く摩り八穴を見て術を施すべし大便を洩らし居る時は術の
 効無きものを知るべし事二重に書きあるも大事の方法故くどく
 記す處なりと知るべし。

襟活法圖解

此の襟活法と言ふは術を施す迄は前と同にて第一に死相を見る
 事八穴を調べて全身を能く摩りて其上にて靜に抱起して左手にて
 假死者を圖の如に抱かへて我が右膝頭を突き爪先を立て左足
 は死者の横後に立膝をして挿畫の如くに右手先をなし中指に人
 指を重て小指と紅指は折て親指と外二指に充分に力を入圖にし

襟活法圖解

襟活法圖

襟活法の施方をしめす處右手を以て
て明星の兩脇に指の當る處なり

襟活法圖解



二六七

襟活法圖解
 二六六
 めす通りに構て術者は總身に氣を満て口を結びて明星の處に右
 の手を當我が生氣を假死者に移やうに(エイ)と掛聲を發するとた
 んに左手を前に死者を屈むやうになすと同時に下より臍の處迄
 突込むなり充分に臂を張り下より死者を覗き見上る心得にて術
 を施すべし。
 又誘活法を施して尙又襟活を入る事あり此の誘の活と襟活は二
 種の活連絡てあると云も可なり淺山一傳流の活は一種にて只一
 つ有のみ巻中に著すなり。
 此活法を級段によりて教師は次第に許す先生もあり眞揚流
 には十三活法有り中には十六活法ありと言ふ先生もあるが此活
 法と云は諸先生の極意の許の物の内にて巻物を給與て段級を定
 める事もあり。
 尙此の明細は教師用及柔術解剖圖解書に著すなり餘言

陰囊活法圖解

陰囊活法圖解

陰囊活法とは俗に畢丸活の事なれども前の襟活を襟活と云ふ方が紛らはしからざれども昔よりの云ひ慣はしなれば矢張り襟活といふべし、是は高き所より落ち畢丸を腹内に入るゝ事あり又稽古中過つて蹴込まれたる時に施す活法なり是を施すには假死者を抱き起して第一圖の如く構へ術者は死者の背部に廻り下腹に力を入れ眞之位第二の構を斜にし死者の兩脇の下へ兩手を差し入れ抱き上げては落す事六七回行ひたる後死者の片手を持ち上げ圖の如く右足の●點の處にて靜に後襟活を施す時は畢丸然して又元の如く抱き上げては落したる後襟活を施す時は畢丸が元に出るなり其の機に乗じ活を施すべし意外に此術は心安けれど六ヶ敷點もある故實地に出會ふ時は能く覺へ置くべし又往々畢丸を片々潰す事あり最も大事の術なれば柔術家は常に歩

するも陰囊を圍みて氣を附けべし第一圖より第二圖の如く數回
 施術したる後又死者を靜に仰向に寢せて我は其兩股の處に跨り
 兩手先の指を組み合せ兩肘先を死者の臆中の兩脇に押當て右膝
 を突きて爪立ち左足は立膝を爲し下腹に氣を罩めて(エイ)と聲を
 發すると同時に死者の首を前へ持ち上げ兩肘を當るなり此活を
 施すも又襟活を施すも差支なし數回も施して其の効なき時は死
 相を見るべし最も死相は術を施す前に見るべきものなるが手遅
 れとならざる様術の方を先に施すなり此の相見の概略を記すれ
 ば第一卒倒者の眼瞼を開き見るべし眼中の瞳孔俗にひとみと云
 ふ處が白色に變ずる時は蘇生の効なしと知るべし又唇を開き見
 て元の如く成らず開きたる儘なれば蘇生の見込なしと知るべし。

圖一 第法活囊陰

抱かへて上げかけの處
の圖此の様に六七度を
上たり落したりする構へ
なり



陰囊活法第二圖

陰囊活法圖解

後稻妻を蹴込居るの圖なり●點に氣付るべし



陰囊活法第三圖

中臆の脇に我が肘を押し當てて
前に引起す處なり先組し居る

陰囊活法圖解



裏活法圖解

此の活法を施すには死者を腹這に寝かせて術者は死者の両膝の
 邊に跨り左膝を突き爪立ちて右膝は立て死者に障ぬ様に爲し我
 が全體に力を罩め兩掌を揃へて背中を能く上下及肺入惚活の腹
 部を摩擦し而して兩乳の後背部の第六髓の左右と思ふ處を下よ
 り突上るなり電光の處の肺肝を開く爲め呼吸の運動を爲す故に
 蘇生するなり詳細は教師用に著す。

裏活法圖解

裏活法圖

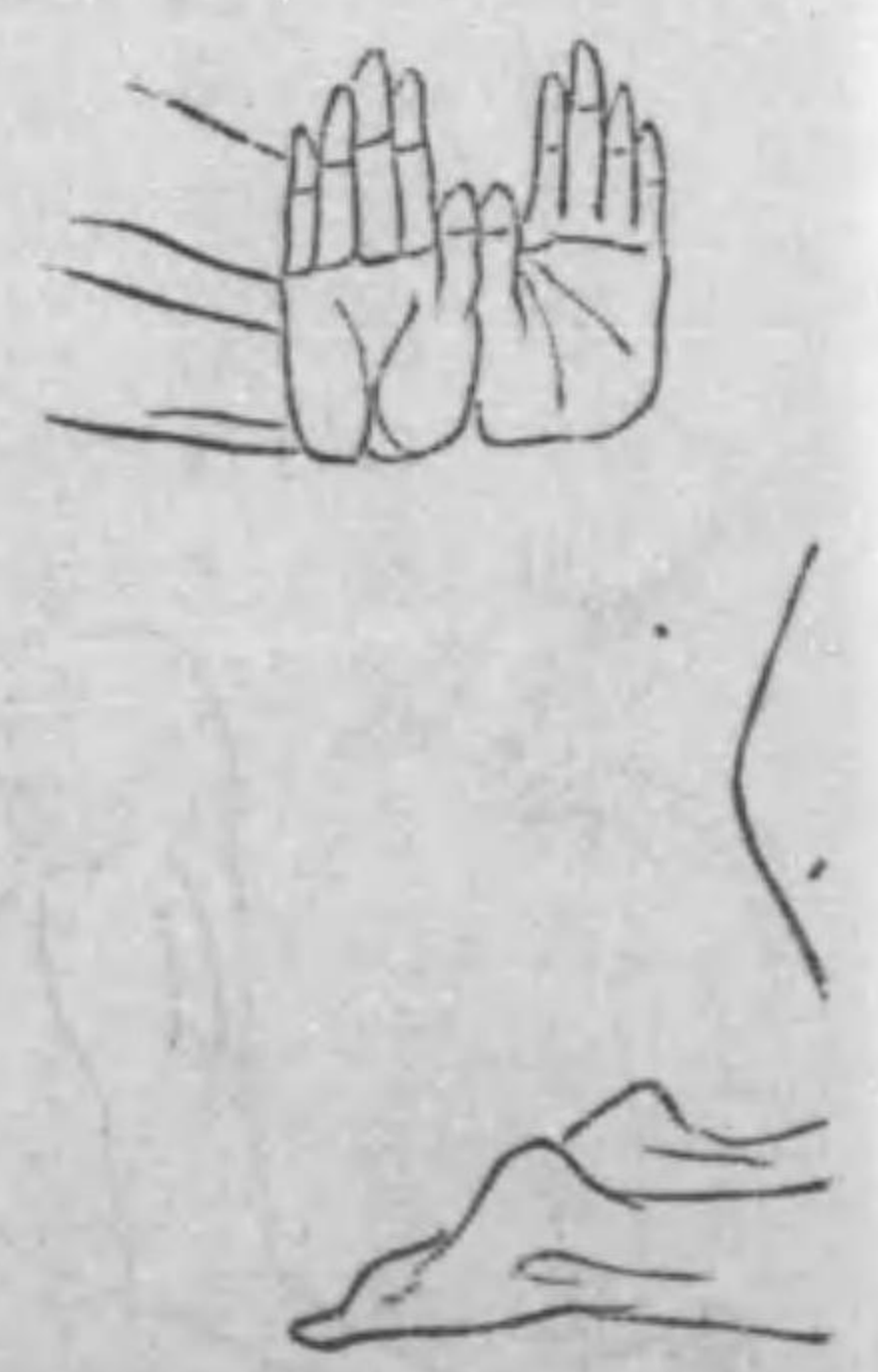
此圖の解は死者を俯に向て臥しか背を擦るに活と云ふ

裏活法圖解



淺山一傳流の活法

抑も此活法は淺山一傳流教師金子勝平先生の教傳にして手数は唯一手にて蘇生する活法なり著者未だ實地に施したる事なけれど是は死者を左手にて抱込み右手五指を揃へて水月下の處へ當て右足の小指の方を明星の下の處へ押し當て左手にては活所を打ち此の三つを一時に氣合を入れて施すなり(ニイ)と發聲と共に前の方法の如くの術なり假に此方法は一理あり柔術解剖書に實地明記すべし。



淺山一傳流の活法

淺山一傳流活法

仕方の圖畫は本文に参照すべし

淺山一傳流の活法



末書に加へて此の書を著についで義爲數年間にして今度教科書を專習科に加へりたるを幸に新故の大先生の名言實地の研究として尙助技を四
 五名に依頼し畫工を奥村義三氏を主任にし是又二三の助技を加へて引書も用ひ古來の秘傳を集て更に青年の輩にも現今の諸先生
 の參考生徒の讀本として數年の巧にてよう／＼冊子に綴る事
 の出來上りて成りたる者なれば讀者諸君は今此連名の先生に附
 て教授を受たるも同じ事なり其人の概略を記せば左の如し

故久富鐵太郎、金谷元良、横山作次郎、高木芳雄、金子勝平、今泉八郎
 市川大八、井上敬太郎、大竹森吉、吉田千春、水谷、今人皆傳、神保信重
 五世磯又衛門、八谷建三、中村半助、指田吉晴、奥田松五郎、尙此の本
 に對し技者をして田中宗吉、吉田、津田、山崎
 の各免許の先生を以て著したれば此冊子は古今の名人の手を以
 て教を受たるも同様なる珍書なれば讀者は其廣徳なる事情を察

二七八
して常に勉強有らん事をば著者の心切なる所をしり玉へ是に本末にのこす處なり是に引續き二三年の内に追々著す者なり

大正元年十月中旬

免許井口義爲記

活亂捕法 柔術教科書 終

大正元年十月十日印刷
大正元年十月十四日發行

柔術教科書奥附

正價金壹圓貳拾錢



著作兼
發行者

印刷者

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十三番地

井口松之助

東京市小石川區久堅町百〇八番地

荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

博文館印刷所

東京市神田區錦町一丁目十三番地

魁眞書樓

東京博文館 東京東京堂

大寶文館 全國至所有名書肆

發行所

大販賣所

全國大賣捌取次販賣書籍店

東京業同取次處

東京市全體雜誌店	服部求光閣	大岡川屋	岡村庄兵衛	淺見文兵衛	有斐明堂	東新橋美隆堂	鍾大橋洋堂	大金櫻堂	北松隆三書	松目誠山書	至高誠山書	大上倉屋書	三松省松書	二西松書	中強西屋書	勉強屋書				
濱野弘集	天有野	淺見	梶野	星架	百瀨	川中	寶山	松川	東合	石川	鈴木	藤谷	岡田	奧田	森精	矢部	三宅	杉本	青木	名倉
朝陽	岡山	高岡	金澤	同本	諏訪	松本	長野	仙臺	千葉	同岡	大岡	鹿兒島	熊本市	留者	熊本市	留者	熊本市	留者	熊本市	留者
日陽	山陽	學都	宇宮	宮日	水琴	高見	西澤	藤原	多田	覺記	目黑	甲斐	久幸	吉兵衛	長崎	菊文	一魁	小島	松浦	川瀨
房社	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店	堂店

全國至ル處ノ書籍雜誌店ニモ賣捌候也

魁眞書樓最新出版書目錄

諸大家大先生題字序文
免許柳松齋井口義爲著述

殺活自在 柔術極意解剖圖鑑 刊近

本書は最も著者が多年間諸先生と交際し研究会等見聞なしたる事珍說與義柔術家秘法形亂捕廳所接骨方諸死活法に解剖講義に挿畫を以て説明し秘術法全體に圖畫加へたれば諸先生参考生徒の心得に至る迄も著又藥種活法古來の傳言名人の發達格言を集め義爲一生一代著書と云は此冊子に残し滿天下の武士道式を廣く教へて性來に我が志氣を講讀諸君に思を殘す爲一本に綴りたれば發行の期日を待て求め給へ

柳松齋 井口義爲先生著

獨習 劍舞大鑑 附居合 法圖解

全一冊 四六版頗美本
正價金卅五錢
郵稅金四錢

本書は井口義爲先生永年苦心の結果居合の型及劍術の型都而眞の武術的原理より割出して劍舞の手を附て其様に圖解を加へて最も平易に解しよく點線陰圖を以て此書を一見しても獨習自在に覺られること鏡の如くなり故に此書の奥義を極めば忽ち勇壯活潑心なふ精らす神を起して倭鬼を悟る實に天下無比の好劍舞獨習の良書也發行所東京 博文館 東京堂

法學士 大原彌一郎先生 合著
辯護士 齋藤孝治先生

新舊 対照 ポケツト 刑法

参照 大審院判例要旨

本書は四、五、六號の活版を以て上等紙に印刷したれば極めて鮮明なり本書は四方の主人は勿論小僧に至り迄も常に心得居るべき事は云迄もなく故に輕便を主として大冊を懷中本として新舊の刑法を對照として明かに解し得べき珍書なり

小川直子序文 中島春郊先生著

總クローズ金文字頗美本
正 價 金 三 拾 餘 錢
郵 稅 金 四 錢

家庭 料理 儉約 美食

菊判頗美製本

正 價 金 卅 五 錢

郵 稅 金 六 錢

此書は表題の如く來客其他日用に便する僅なる費用を以て即席に美味なる料理を製法し得る方法にして春郊先生の好に令嬢靜子が實驗の上にて最も平易に出来る殊に親切に書き綴りて各奥方等の臺所調法とも云へべき者なれば男女にかゝわらず缺べならざるの最も良書なり

直眞影流十五世 齋藤明信先生著

直眞 影流 劍術 極意 教授 圖解

興版總クローズ美製
正 價 金 壹 圓
郵 稅 金 八 錢

本書は齋藤明信先生が直眞影流劍道の形に挿畫を加へて眞の劍道之教を各派の先生及生徒に至る迄手を以て教へる如くに圖畫に説明を附て何人にも圖を觀たるばかりにても劍術の形を獨習し得られる者なり其目錄法定之部○八相發破形挿圖の數式十三圖○一刀兩斷形十二圖○右轉左轉形十七圖○長矩一味形二十圖○鞘之形部龍尾左右形圖左十四圖右十圖○面影形左右形十五圖○鐵破進退形左右十六圖○松風形左右十六圖早船形左右十一圖○曲尺形十三圖○圓連刀連體速形十三圖
●袋鞘之部小鞘之部○風勢形十餘圖○水勢形五圖○口切先返し形五圖○鐔取り形六圖○突非押非形七圖○圓快形六圖○双挽眞劍之部挿畫第一本目より第四本目迄に四十六圖以上也
右目錄を一讀しても劍道の心得ある者は必も一本を求めて著者の心を込めて發行者の熱心なる事を知れ

全國一手大賣捌所

日本橋區本町三丁目 博文館

發行元

魁眞書樓

高等女學校裁縫教授 高橋ルイ子著

廿世紀裁縫自在

菊判倭綴全一冊
正價金三十八錢
郵税金六錢

本書は表題の如く初心者にも教育の参考にも相成新案裁縫手引草とも云べき者にて手を以て生徒に教へる如く圖解をほどこしたれば先生が永年の經驗のものを一冊にして女學生及び教員等の爲になる珍書と云べき者也

東京弓術講習會編纂 (第四版)

諸流 弓術極意教授圖解

菊總クロース製全一冊
定價金七十錢
郵税金六錢

本書は各派弓術家の奥儀極意を集めて其上に古書及歴史上弓術起より弓術の解説に圖解を以て先生等の心得へ亦中學校以上の日本歴史の参考にもなり弦方の圖解古式の禮法等迄を明細に圖畫をもつて記したれば一本を購求して此書の心妙なる事をしれ

東京博物研究會編纂

和洋四季 草花培養圖解

四六版總クロース類美製本
挿畫二百種石版數十度
刷の極彩色の口繪にて廿七葉入
正價金八十五錢 郵税金六錢

本書は、よんで字の如く草花を描いたものではあるが、全部彩色をして、草花の美を照會すると同時に往々世間に誤られたる名稱を、これによつて正しい名稱に改めて戴きたいのが此の書の眼目で、終りに栽培法、各種の特質など記述したのは、一層この圖解を美ならしむるの目的に外ならないのであります、學校園設置用、家庭園藝用として愛讀せられんことを、切に希望のあまり一言はしがきす。

正二位勳一等侯爵 蜂須賀茂昭閣下題字
正四位文學博士 本居豐穎先生題歌
意通考案士 中島春郊翁著

賜天覽 庭造法圖式大鑑

大本類美製箱入全一冊
竪九寸餘横一尺二寸五分
口繪寫真前田蜂須賀家庭
全體石版彩色數度刷
正價金三圓五十錢
郵税內國一冊金十六錢

本書の著者中島先生は舊金澤藩前田侯爵家の御庭園を造られたる家元にて古來より同家に秘藏せる圖面を今回世に公にせるものにして近時諸國に於ける庭園及我邦有名なる庭園並に眞行草を蒐集し庭の大中小の分部に符點を施して造園家をして將に垂涎せしむるの珍書なり大高評を博したる良本

7A61

俳諧正派會長泉々居穿井先生閱
指頭庵主人服部耕兩先生著

應用 例 **てにをは俚言解**

四六判美本全一冊
紙數百七十餘頁
正價金三十錢
郵税金四錢

本書は北總の俳傑指頭庵主人服部耕兩先生が夙に明治の俳迷の振はざるを愁ひて俳諧正派のために心血を注ぎて是が編纂を企て幾多の歳月を費して初て大成す即ち冠字するに應用適例の四字を配し名けて天滿波俚言解と云ふ材料書類豊富にさてしかも能く其錯雜を來さるのみならず經營縱横秩序を犯さず唯一絶好の書也蓋し斯道に志ある者は素より據て來るの淵源を知らんと欲するものは正に机上一本を備へざる可かざる也

竹田 畫譜 全貳冊

竹田 畫譜後集 全貳冊

對山 畫譜 全貳冊

靄厓 畫譜 全貳冊

小本各康熙
綴り頗美本
正價各金廿五錢
郵税二冊金四錢

右四書は彩色刷にして體裁頗美製魁眞書樓自浸の珍書なり

終